明治廿七年二月廿四日發行

女鑑

第五十七號

東京國光社

女鑑第五十七號目次

大野きさ子



女鑑

梅花

殘りたるゆきにまじれるうめのはな
　　はやくな散りそゆきは消ぬとも
かすみ立つながき春日をかざせれど
　　いやなつかしきうめのはなかも
よろづ代まとしはきふともうめの花
　　たゆることなく咲きわたるべし

窓の戸推し開き、庭の面打ち眺むれば、春の色、やゝ、物にあらはれ、昨日ま

では、枯れ萎れたりし草も、漸、時を知り、雪霜を帯びたりし木々も、何となり、景色の變はれるさまに見ゆるにつけて、人の心も、自、和ぐめるに、梅の香の、風のまに〳〵薫り來る。其のゆかしさ、言葉にも、筆にも盡くし難し。前に掲げたるは、古人が、梅を見愛でゝ詠まれたる歌どもなり。かくの如く、古より、梅の花の、人々に稱揚せらるゝことの甚じきは、はた、如何なる故ぞ。其の花の美麗なるが爲か。あらず、花には、尚、是よりも美麗なるもの多し。其の薫の馥郁たるが爲か。あらず。薫には、尚、是に如くものなきにあらず。あゝ、如何なれば、梅の花は、かく、世の人の稱賛を受くるにかあらん。

すべて、物の、常ならぬといふは、必、其の一節の、他の物に秀でゝ勝れたる所あるにあらざるはなし。其の一節こそ、他の及ばざる所なれば、稱揚を惹き

起こす基とはなるなれ。梅の、人に尊み愛でらるゝも、亦、其の一節のあるによるぞかし。

萬の花の、盛に咲き匂ふは、多く、艶陽駘蕩たる長閑けき春日ならぬはなし。彌生の空の、いとも艶なる時に、百芳群英、共に咲き出づるは、恰、凡常の人の、時に合ひて、噪ぎ惑ふが如く、いかに、芬芳艶麗なりとも何かは、稱讃するに足らん。たゞ、梅のみは、寒風凜烈の朝、雪霜虐饕の夕といへども、其の時至れば、必、馥郁たる香氣を吐き、瓊瑤の如き英華を開き、萬の花の魁となりて、少の撓だになく、春の初に抽き出でゝ、獨、春を得たるが如きものは、眞に、儼然たる一節のあるあればなり。

梅の、人に愛せられ、且、稱揚せらるゝは、全く、其の風霜を凌ぐ節あるも

百花に先だちて、淑姿を備ふるとによれり。されば、世の正しき人々に、愛護せらるゝこと、實にことわりなり。これ、其の節操を守る所の、正人賢者の、時に阿らず、俗に從はず、其の愼むべき所を戒愼し、儼然として、身を立つるものと、能く、相肖たるを以てなり。

婦人の行に於けるも、宜しく、梅の如くなるべし。蓋、其の節操と謂ひ、其の姿容と謂ひ、其の芳香と謂ひ、而して、又、其の實を結ぶ所をも併せ見は、所謂、婦人の四教にも、能く適合して、婦人には、こよなき儀表ならん。

あはれ、世の諸孃、人の則とすべき道は、すべて、遠にはあらで、いと近にあり。柯を取りて、以て、柯を伐る理にて、能く、近く、其の喩を取りて、我が身を修むる法となさは、何物かは、則の存せざるべき。能く、其の心を用ゐて、

省み察する所あらんには、自然よ、學問の道理に適ひて、意を誠にし・心を正しうし、身を修むるに於いて、亦、其の難を見ずして、其の德、自、全く修まり、梅花の、人に稱揚せらるゝと同じく、世の賢人にも稱贊せらるゝ淑女賢婦とならんこと、固より期すべきなり。諸孃、徒よ、陽春の好時節を待ち、百芳繽紛の時をのみ、樂しむべきものとし、彼の浮薄なる桃李などの如く、輕佻なる海棠、牡丹などの如きを以て、婦人の本分と誤り認めて、世の正人賢者の、笑をな招きたまひそ。

かすむ夜の月をみるにもくもらじさ
おもふこゝろをなほみがきつゝ

論說

人の短を誹るべからず

大林弘一郎

人のかげ事を、假にも言ふべからず。人を誹るは、我が短を顯すなり。恥辱、之より、大なるはなし。と、古人もいへる如く、人の、其の身を辱め、其の德を失ふは、多くは、其の口の上より出づる過に原因することなれば、言語を愼むは、人の、最、急務とすべき所なり。

さて、尋常の人々の相會する時は、世間に有り觸れたる浮說など言ひ出づる中に、必、人の行の善惡を排難し、或は、其の陰事を摘發し、人の善をば稱揚することをなさず、人の美事をば、却りて、之を誹るは、常人の情態なりとす。この情態こそ、實に忌むべきことにて、其の身を修め、其の德を全うせんとする

ものは、宜しく、深く注意すべき所なれ。何となれば、我より、人の事を批議するときは、人、亦、我を誹り怨むは、必然なり。斯の如く、多くの人に對して、怨を買はゞ、我が身、いかでか、獨、立つことを得んや。又、かく、人に怨を受くるは、其の身の恥辱、之より、大なるはなし。啻に、其の身の恥のみにあらず、其の親を辱め、祖先をも辱むることなれば、痛く戒めざるべけんや。古語に、人の短を言ふことなかれ。己の長に誇ることなかれ。と言へるは、誠に、良き誡と謂ふべし。

人、或は曰く、すべて、事の是非と、善悪とを判かち定めんには、人の身の上のことゝ雖、などか、厭ふことあるべき。必、其の善き所は、之を譽め稱へて、益、其の躬行を勵ましめ、其の悪しき所は、飽くまでも、之を謗り斥け、其の

道に違へる所を改め戒めて、善行を修めしむること、誠に、人の人たる正しき道を以て、僻める人々を矯正し、匡救する道にもかなひて、人の善を好し、惡を惡む正理に從ふものならめ。然るを、唯、人の善を語をのみ好して、人の非事などは、誹り語るべからずといふは、善を好みし、美を爲すには良けれども、惡を惡む道には如何ぞや。假令、自は、其の身を修め、獨を愼みて、過つことなからんにも、他人の過失、非行を救ひ匡し、改め移す時なかるべし。かく、已ばかりのみ、善を行ひて、他人は顧みもせぬは、實に、あさましき事にあらずや。これをしも忍びて爲すべくは、いかなる不人情の事か、忍ぶべからざらん。人として、此の如き不人情を忍ぶべくは、相互の親誼も破るべく、禮讓威儀をも敬しむに及ばず、各自の勝手に任せて、世を過ぐすに至らんも知るべからず。か

くては、世道も立ち難く、人倫も廢るゝに及ばんとす。かゝる大弊害を招かんよりは、寧、人の惡事非行をば謗ることはあるとも、人を傷ひ損するに非ざるよりは、暫く之を寛恕するに如くはなしと思はるゝなりと。

余は、此の論を以て、最、義理を誤れることの甚しきものとなす。苟、人たる道理を知るものゝ、口にすべき所に非ざるものとは、此の如き論を云ふなり。若も、此の論にして、世に行はれれば、世を害し、俗を壞り、人情を薄からしむるもの、之より甚しきはあらざるべし。抑、人の交誼は、情の厚きと、薄きとによりて、輕重を爲すものなれば、其の情をして、常に、相和ぎ睦びて、能く、相通ぜしめざれば、世の中は、治まり難く、風俗も、淳ならざるものなるに、或人の論ずる所の如く、人の意に悖りても、人の怒を招き、人の怨を買ふとも、

少しも厭ふに及はずとせば、第一に、人々の平和を破りて、其の交情親誼も、乖離して、全たからざるに至るは、必然なり。此の如くにして、世道を維持せん、風俗を矯正せんと謂ふは、余は、其の何の故なるやを知るに苦しまざるを得さるなり。今、其の、最、異なる點に就て、之を辨じ置かんとす。

古語には、君子成二人之美一。不レ成二人之悪一。といへる言もありて、總べて、人は悪を悪む心は、平常の間、尋常の人にも、必、あるものなれば、悪事を、良として爲すものとては、一人もなき筈なり。されば、善行は、人の、最、好む所にして、悪事は、之を聞くをも厭ふは、普通一般の人情にして、人性の善なる所の證據なり。又、此の姓あるが故に、己の善行などを、人より稱揚せらるヿなどは、一層に、其の心を嬉ばしむるもの、萬人、皆、同じき所なり。之に反して、

若、其の過失を謗られ、悪事を訐かれたらんには、いかに、口惜しく思はるゝも、知り難からん、是、乃、人情の、最、正しき所にして、一般の常情なりされば、人世の務は、此の常情を本として、總べての標準を定めされば、其の平和を保ち難きなり。故に、悪を悪むことの甚しからんよりは、寧、善を好することの過ぎたるこそ、誠に、人の情に適合ひて、自、其の善行を奬勵するに足るべきなれ、是、人をして、善を爲すを樂しましむる道にて、風を厚くし、俗を淳にし、人情をして、親昵せしむる本なれば、世道を維持せんには、必、此くの如くならざるべからず。然るを、主として、人の非事悪行を擧げ、隱せる事などを發き出だして、之を辱め、其をして、善に向ひ、行ひを改めしめんとするも、誰か、其の無情を怨み、其の殘刻を憤らざるものあらんや。假令、其の心の

中には、其の非を知り、其の悪を悟るとも、勢、其の謗議に鑑感して、其の行を改むることは、尋常の人には、到底、爲し得られざる事なり。故に、若、已の身、既に修まりて、他人をも誡め諭さんと思はゞ、固より、其の善行を稱して、自、悪に遠からしむべし。又、其の行ふ事などを、他の人々に語り合ふにも、其の道義に違へりや否やを究むるを、悪しきと謂ふにはあらざれ共、若、眞に、其の人を、善人に回さんとせば、宜しく、痛く、之を誹謗せずして、其をして、怨むるゝ所なくして、心情の中より、悪を作さゞらしむるこそよけれ。激怒せしめて、將、何の益かあらん。且、又、陽には、言葉を善くし、程能く言ひなして、陰には、其の悪事などを評し謗るは、最、小人の所業にして、人情に悖り、道義に乖けることと、甚しきものなれば、啻に、人を、善に導くこと能はざるの

みにあらず、適以て、我が身を辱め、我が短を著すに足るなり。斯かる無益にして、而も、害あることを知らで、徒に、是非を論じ、善悪を判かつを以て、主要として、情を酌み、誠を盡くして、之を感ぜしめて、其の行を勉め勵ましむることをなさゞるものは、豈、其の秩序を誤り、其の道を失へるものにあらずや。斯かる議論こそ、世の人の心をして、唯、刻薄の理論のみを主として、仁慈親愛、温柔敦厚の情義に乏しからしむる基本根源となるべきなれ。是、余が、深く、世の爲に憂慮する所にして、茲に、之を辨ずる所以なり。世の人々、男女に論なく、貴賤を別かたず、苟、正しき我が大御國の御民たらんことを願ふものは、最、心を、人情の際に留め、能く、古人の説く所を味ひ、其の身を修め、其の徳を養ひ、兼て、人を善くし、所謂、己を修め、人を治むることの極功を

奏せんことを勉むべきなり。

女子要言　第二篇（廿八）

三輪田眞佐子

先、上流社會の良女子に就いて述べん。抑、人には、各、分限あり。其の分限を盡くすものにあらずば、好人物と云ふべからず。世に、一時の富裕、或は、生來の門閥に由りて、上流社會と云ふ尊稱を甘んずる女子はなき乎。吾が、恒に、上流と云ふ人爵は、之に相應する天爵あるものに附すべき名なりと信ずるは非乎。而して、今日、上流と自信ずる女子は、果して、悉、天爵を供ふるもの ゝみなる乎。體に、麗衣を纏ひ、口に、美食を食ひ、優遊として、高閣に住み、何事をもなさず、何事をも考へず、唯、蟬鳴く日には、凉風の少なきを怒り、霰降る夜に

は、ストーブの暖ならざるを譏く有樣にて、反りて、女子たる本來の職分を、賤業として、悉、婢女に委ね、五十年の人生を、徒に費すものは、如何なる天爵を有する乎。勿論、吾は、上流女子に、下流女子の、將になすべき所のものを、奪ひてなせよと勸むるにあらず。地位相應の行ふべき所のものを行ひ、考ふべき所のものを考ふる本分を盡くせよかしと思ふなり。而して、本分を盡くすものは、天爵を有するもの標準。即、上流に居る女子は、風俗の標準となり、慈善の淵源となり、及、生活の模範とならざるべからず。故に、其の嗜む處も、書を讀み、道を講じ、或は、和歌を詠ずる等、有益なるものに限るべし。昔日、德川頼宣の母は、刀劍珍器は、以て、寶とするに足らず。唯、武功の勇士は、以て、寶とするに足ると言ひたりき。今日、上流の女子は、如何なる意見を持ち、

侍る乎。近來、歐洲諸國婦人の服裝を見るに、其の表衣の襟、恰、頸を包む如くなるは、其の始め或國の皇女、頸に、醜くき疵あり、之を掩はんため、故に、襟を廣くして、斯く裝ひしを、其の后、之を倣ふもの、多くあるより、遂に、かゝる風俗をなしたりきとかや。實に、上の好する所、下、之より甚しきものあり。されば、上流の女子、好模範を垂れば、天下の女子、善良に進化し、惡模範を作らば、天下の女子、邪僻に退化せん。故に、風俗の標準をなす女子にあらざれば、決して、此の流の好人物と云ふ値なし。殊に、我が國の華族の如きは、尊き皇室の藩屏なれば、其の天爵を全くして、人爵を空しからしめざることを勸むるは、王事に、忠實となり、幷せて、自、好人物たる所以となるなり。凡、富貴は、怠惰の源をなす恐あれば、富貴の家の母たるもの、其の子孫を怠

惰に育てざらんことを注意して、家名を汚すべからず、菅原右大臣の母は、「ひさかたの月の桂も折るばかり家の風をも吹かせてしがな」と歌ひたりき。其の賢明の聞こえ高きは、宜なる哉。我が史上には、松下禪尼、及、正行の母の如き、上流女子の好人物、極めて多し。蓋、日本女子の特得ならん。

次に、中流女子の好人物に就いて述べん。玆に、中流と云ふも、其の天性の區別にあらずして、地位の境遇、及、生活の程度より、便宜上、假定するものなり。凡、一國の强弱は、少數の貴族、及、淺識の下民に關するより、主として、多數なる中流人民の實力如何に由りて定まらん。されば、中流女子に、好人物多ければ、國家盛運に向ふや、明なり。而して、此の流の好人物は、夙に、學問を修め、理義を悟り、品行を愼み、貞操を守り、女事萬端を知り、時として、上流の觀念

をも持ち、時として、下流の業務をも行ひ、傍、交際を圓滑にする識量を有ち、剛腹なる男子の中間に立ちて、調和を謀り、能く、育兒の道を知り、亦、家裡を修め、施きて、國家の基を固くするに足るものならざるべからず。稻生恒軒の妻はる子は、家にありし時は、繼母に事へて孝順に、嫁しては、舅姑に能く事へ、良人に貞操なるのみならず。儉素の心厚く、慈悲の情深かりき。而して、格別の學問はなさゞりしも、實驗を記して、修身齊家等、女道に關するものを集めて、七卷をなせり。恒に、小學を好み、裁縫の傍、子弟を敎授したりし程なりければ、遠近のもの、賢女として、仰がざるものなし。此の如き女子は、中流社會の好人物と云ふを得べし。而して、今日、各女學校にあるもの、果して、好人物たらんため、學び居る乎。若、虛飾のため、末藝を知らんと欲して、學び居るもの

なき乎。詩に云ふ、既明且哲。以保二其身一。と、諸孃、能く、精神を修養して、其身を保てよ。身を保つものの多ければ、國、自、榮えむ。

其の次は、下流の女子に就いて述べん。思ふに、此の流の女子は、概して教育なく、學問なければ、好人物と云ふべきもの稀なれども、天の、人に賦する性素は、固、至善なれば、其の自然を害せざるものは、道に協ふるものに外ならず。故に、此の流の女子中までも、言語、至りて、文飾なきに、反りて、可憐の氣色顯れ、動作、極めて粗野なるも、反りて、質朴の氣風見え、恒に、赤誠を吐きて、父母を安んじ、貞操を守り、良人に事へ、敎戒を加へて、兒女を育て、信實を懐きて、親戚を睦ましくし、且、隣保を親しみ、總べて、女子の天禀を全うするものは、此の流の好人物なり。子夏曰はく、力を竭くして、父母に事へ、身を致し

て、君に事へ、信義を以て、朋友に交はるものは、未、學ばざるものと云ふも、吾は、學びたりと言はんと。實に、彼等は、未、學問をなさずと雖、其の行ふ所は、既に、學問の目的に適ふものなれば、唯、文雅を欠く恐あるのみにて、好人物たるに違はず。然るに、偶、唯に、文字を讀むことを得るを以て、高尚なりと思ひ、外容のみを修め、心術を顧みずして、此等下流の好人物をも輕侮するものあるは、誤なり。蓋、田舎の女子は、他力を待たず、自力を以て、米黍を作りて食ひ、絹布を織りて服し、俯仰毫も、天地に恥ぢざれば、反りて、虚飾の生活をなす都會の輕薄女子に勝ること遠し。昔、白居易は、人間榮耀因縁淺。林下幽閑氣味深と歌ひたりき。徒に、田舎を賤むものは、反りて、其の見識の卑しきを表すものにてある。否、女子の、筆墨を弄し、文詞に工なるものは、義理を半解し

反りて、其の德の累をなすものなしとせず。然るに、田舍山村の女子は、天然に感化せる、即、彼等菁々たる田畔に耕せば、雲雀、碧空に歌ひて、其の心を清淨にし、秋風、髮を吹く夕、鍬を肩にして歸れば、玲瓏たる眞如の月、其の念を純潔になすめり。故に、彼等身は、天然と、消息を共にし、天地の精神を受けて、生存するものなれば、其の好人物たるは、亦、天然なり。然れども、學はずして、斯の如きものは、極めて少なきを以て、諸孃、學を忽にする勿れ。

詩に云ふ、無言不酬。無德不報。と、是れ、因果の理に外ならず。されば、以上の如き好人物は、徒に、痴女凡婦と共に、蠢々として、氣中に生まれ、齷齪として、土中に逸るべきものにあらず。必、天は、好人物に、好果報を與ふるものならん。されはにや、好人物は、力は、己の身を處するに餘ありて、自、内に顧

みて、毫も疚しき處なければ、かきくらしふる五月雨の日も、河水寒く、千鳥鳴く夜も、恒に、如何ばかりか、心廣く、情樂しからん。否、好人物は、總べて、其の仁、地の如く、其の智、天の如くして、所謂、天工に代はる大任を盡くすものなれば、誰か、外より之を敬し、且、愛せざらん。是、人生の快事、及、幸榮にあらずして何ぞや。然るに、通常の思想を以て考ふれば、敬は、賤者が、尊者に對して盡くし、愛は、優者が、劣者に向ひて與ふるものなれば、才識機敏なる女子は、稍もすれば、敬せられて、而して、愛せらるゝことなく、無智無識の女子は、多くは、愛せられて、而して敬せらるゝことなし。蓋、學識ある女子は、主我の見識強くして、可憐の美德を養はず。無學の女子は、自裁の精神弱くして、殆、男子の翫弄物となるをも顧みざるより、斯く、差異を生ずるなり。吁、人と

生まれて、敬せられず、女子と生まれて、愛せられずとせば、亦、遺憾ならずや。思ふに、好人物は、才を以て、徳を助け、徳を以て、才を和ぐるものなれは、人より、單に、尊敬せらるゝのみならず、亦、欽慕せらるゝものなり。今日、女子の風潮を見るに、未、身に、敬を受くべき品格なき爲、男子より蔑視せらるゝを、男尊女卑と怒り、反りて、愛を受くべき女子の特質を傷けんとす。惜哉。いざ、女子、朝な、夕な、智徳を琢き、敬と愛とを、兩ながら、身に受くる好人物となれ　されば、敬するもの、何ぞ、女子を尊からずとや云ふ。愛するもの、何ぞ、女子を卑しとやは云ふ。

史談

鹽井雨江

大野きさ子

おのれ、いかにまつらむ。此の頃は天行く雲を見ても、うきたる世の心にかゝり、大路にのゝしる人をきくも、又おもしろからぬ言のみ多し。思へどはかもなき世、あさましの人、きけど腹立し、見れどおもしろからず。やみなむ、やみなむ、誰こめて古の世を見、昔の人をきくに勝す事あらじ、と思ひさとりて、文机の下、かの書、この書と取りひろげて、獨り語り、獨り論ひ行きたるに、大野きさといふ少女のゆかしき物語りありたり。一度讀みて、思はずも袖をぬらしぬ。二度くりかへして、ものもおぼえずなりぬ。三度うちかへして、え堪へず書を抱きて伏しまろみぬ。げに、あはれなる少女、げにもやさしき心、あはれやさしきこのきさ子。岩城の國、耶麻郡にて、中川村といふ里の女子にて、父は又八となんよびて、あやしき賤なりけり、むかし祖の世は、幾代か里の長としあがめられ、ひなながらも、此處わたりに時めきたる家なりけり。さるを、いかにまつらむ。又八の代となりてより、年毎

に、まがつみのみふりかゝり、月毎日毎、悲しき雲のみ立ちまよひて、いつしかに、軒端の光り寒く、門の扉陰淋しくなりけれど、又八は痛く悲しみなげき、仰ぐも高き祖々の固めたまひし此の家の、我世となりて、斯くも世に傾ぶくとありては、人のうち見む事も、はた祖々の思ひたまはん事も、思へばわびしや苦しやと、とさまかうさま思ひわづらひ、思ひなげきて、はては心もかき亂れてか、何地ゆきけむ、いかにおつらむ、行くへも知れず、影だにとめずなりけれど、妻のなげき、きさ子の悲み、いふばかりあらず、よしや軒は傾ふき、門は淋しきとも、つまだにあらば、軒のつま戸の、とにかくに嬉しき事の無からずやは。この軒、この門は假りの中なる假りのやど。人こそ誠のよすがなれ。誠のよすがに離れては、假りの中なる假の宿、いよ〱何に頼まなむ。人ありてだに傾ふく軒のつま、其の人無くなりては何に支へむ。人や戀ひしと思ひまよひ、父や何處と泣き慕ひて、妻と女が、傾ぶく軒に取りすがりて、見あぐれど雲霧のみ立ちまよひて、人の行方の絶えて知るよしなく、淋しき門に立ち寄りて待てども風のみ音づれて、人の歸へり來む影も見えず。人の行方思ひては慕ひ、人の姿慕ひては泣き、やがて、妻なる人は、遂におこがれ逝き

て、むなしき殻をのみ世に留めぬ。きさ子が僅に十一といふ年なりけり。年齒はゆかざれど、心は深ききさ子、ましてや振りわけの、わけて慰む道理を知らぬば、ひたすらにかき亂されて、もの心地もおぼはず、唯母の亡骸をかき抱きて、あなたへまろび、こなたへ仆れつ。のう母さま、父君も何地、たよりもきこえず。今、又母上さへ歸へらず成り玉ひては、此のきさ子を、何とかし玉ふ。いつの春いつの秋に待ちてと殘して　行き玉ふ。父の一柱、世に頼まれずなりし軒、はゝその蔭さへ枯れゆきては、あさぢが原の草の庵、何をたよりて、雨風を凌きはべらむ。父君の御光見えず、母君の露なくなりては、敎への庭の此の撫子は、何を力に、世にやわらむ。光りに露に離れては、草木も何時あるものかは。のう母上、何時何處、わは伴れたゝむ、なのみ行くとも、わはやらじ。わのみ殘すも、わは殘らじ。露の雫の外には住むべくも思はぬを、何處に住めとて捨て玉ふこの撫子ぞ。撫子なれば露には離れぬものを、是非に行かまほし、諸共に行かまほし、冥路の路は闇くして、けはしき路多しときく、獨りにては、いかばかり淋しからむ、案内なくてはいかでかり惱みたまはむ、余ならで、誰かは岩根を凌ぎ、おどろをわけ奉らむ。母君獨りにて

は、いかでしやらなど、いへども、引けども、甲斐なき骸に泣きすがれど、八十に成りける祖母も、冥土の案内は、余こそゆくべかりしものを、やうなき者のながらへて、やうある者は消しやすき露のうき世、今は一刻も、かくては見る心なし。汝れも母をぱ慕ひてゆくときかは、余も又わが子わが孫のなつかしき袖をつらねて、諸共に冥土は行かむ。余も共にと、これも殊更老の力なげに、歸らぬ事をくりかへして、唯さへ弱りし玉の緒の、げにや斷ちもはてなんぱかりなるに、きさ子は、ああ母なくとも、父見しずとも、祖母ましますを、忘れしとは愚なりけり、祖母御は父母の御親なり、妾には、御親の御親なり、たうときは、父にも母にも勝れるものを。母君の臨終の御言葉にも、きさよ、父は行し知れてぞ、冥路にまよまよたり。よべ余を迎ひに來されたり。母の事も父の事も、今よりは歎きなせそ。母のゆくは、彌陀の國、蓮の佳のありといへぱ、恐ろしき事も、悲しき事も絶えてあらず。なか〳〵にうれしかれど、唯孝養盡くさで遺し奉る祖母の上、きさよ、父母なつかしと思はゞ、祖母の上、かへす〳〵といふより外は、仰せもあらざりしを。あな忘るゝとにはあらざれど、愚なりけりと思ひかへして、又淚あらず、里の人々に助けられ

て、野邊の送りを濟したるが、それよりは、朝には必ず父母のみ墓に詣て丶、香華をたむけ、終日は藁うちたゝきて、靴をつくりて、世をふるたつきを求め、夜は終夜、祖母の枕邊、はとりにかしづきて、いねがてにのみあかしたりけり。やがて、祖母も又歸へらぬ旅に出でぬ。いまははやあさぢが宿、かゝらむ露もあらじ、諸共にゆかむとて、亡骸を抱きて、一夜さ、ものもいはず、ねも泣かず。誠に死したらむごとく、里人の彼れ此れ哀れがりて、互に寄りつどいて、棺を出さむとするに、棺をひきとゞめて放ちもやらず、わが祖母を、何處へゐてゆくぞ。つれなや。妾が自ら負ふてこそ、冥土へ行かむと思ふなれど、掃へども止むれども、縋りたるまゝ放たず、御寺へ行けば、同じ穴へと落ちも入らんずる愁嘆。あな心狂ひたり、さな子や、里人どもは皆涙ながらに取り縋りて、僅に連れかへりたれど、幾日か幾夜、佛の御前に仆れたるまゝ、父よといひ、母よとよび、祖母よとくり返へすのみ、ものもくはず、いねもせず、ひた泣きに泣きたりしこそ道理なれ。仆れたる門、くづれたる軒、見れば思へば、父の無念思ひ出られ、よしや女子なりとて、此の軒此の門、必ずや昔のさまにかへさんと、それよりは必死となりて、晝とも夜ともわかず、朝

ともタとも覺えず、世は春なりや秋なりや、花の色も忘れ、紅葉の色もおぼえずなるまでに、いそしみたれど、かよわき女子の、ましてや力も腕も細き少女の手業なれど、心には山をも動かさ、海をも淺げど、力は思ふやうならず。なか〳〵に軒のくずるゝ、門の仆るゝ、防ぐによしなく、いやましに荒れゆきて、庭はよもぎの原と移りて、虫のねのみことく〳〵しく、窓も戸も、あましき蔦の、またり顔にはひまつはり、屋根は大概破ぶれはてゝ、雨に霜に防かんやうなく、壁は此處も彼處も落ち失せて、枕邊にも凄さぶ北山おろし、野邊の木がらし。床も朽ちはてゝ、簀の子よりは、あやしき草の蔓いでゝ、おどろの床とおなじけしきと見ゆるも、何にゝたとへむやうもあらじ。餘りに見かねて、こは餘りぞや、よき家あれど嫁けよ、此處を毀ちてゝ、他處へ移れよ、などいふ人あれど、きさ子は常に微笑みて、げに人見など、見る影もなぎ破家、人の住むとも覺えぬあさましの宿りならむ。さはいへ、妾には、これに勝れたる懐かしき床はあらじ。處彼の床は、父母のまきてし床なり、こゝの簀子は、父母の布きてし跡なり、かの柱は、皆父母の建られしもの、このつまどは、父母が起臥のつまど。こゝにあれば、父母の影も見え、父母の聲も聞ゆ、な

は朝な夕な、父母のほとりに侍る心地して、起臥かゝり嬉れしき宿りはあらじ。父は如何に成り玉ひけむ、亡しと思へど、行方を定めねど亡しとは思ふべからず。よしや妾は女子なりとて、父の家守らで、他家へ嫁ぎては、この家を如何にせん、祖父のありつる代までは、代毎、長ともかしづかれたる此の家をいかにせん。此處に絶えなば、草葉の陰にまゐらん日、仰ぐも高き祖々に、面あたり見え奉る事もいかで叶ふべき。よしや枯るゝとも朽ちるとも、此の家を守りてこそ、枯れなめ朽ちるべけれどといひて、遂にきかず。遠つ祖より代毎の祖々の履歴をむ書きあつむるを、起臥の樂みとして、あはれめでたき家譜を編みて、此を抱きて果てしといふ。げにも和しくも、あはれの心なるかな。父をしたひ母をしたひて、よく家を守り。家名を惜みて家譜をさへ編みたり。あやしき賤の女の手業には、げに上もなき功なり、思ふにつけて、今の世に、唐の書、西夷の學を、多くあさりてか、怪き權理など、くちぎたなく論ふ今樣の令孃たち、洋服は袖短きが故に、働くに便りありなどいひて、さわ〳〵がや〳〵と、守るなどいふ心なく、翼もあらば天をもかけりて、月世界へも移り住まなむと心がけ玉ふばかりの今樣の輕々しき令孃たちこそ、あ

ざましき限りなれなど思ひつゝけ、余も妹あまたもてり、庭の教にも書き殘し置かむと、詞も筆も拙くをかしげなれど、心ばかりをと、かいつらねたる折りふし、女鑑といふ草紙の教へに心を盡くし玉へる山根氏の訪づれられ、これ女鑑にと乞はるゝまゝ、余もうれしくて、賴みて餘白を借りぬ。

岩崎又左衛門の娘ゑつが事

上野弘道

ゑつが事は、古今列女傳といふうつしまきに見えたる事柄なり。この古今列女傳は、上下二册ありて、あまり、世に出でざるふみなれば、中に集めたる事柄も、めづらしきもの多し。今、ゑつが事を揭ぐるに當りて、ことさらに、原文に、一字の修正を加へざるものは、いさゝか思ふむねあればなり。看ん人、その文體のことなれるを、な怪しみたまひそ。

享保年中、森志摩守長孝の弓足輕組頭岩崎又左衛門と云ふ者有けるが、女房は、八ヶ年巳前に病死して、十六歲に成娘一人あり、御旗本山岡七兵衛と申方へ遣し、内室の側に仕はれしが、生付發明なる女にて、勤かた宜敷、主人の氣に入り、年數も

六年勤て廿一歳に成ぬ、元來急度奉公と申ては遣ひ不申故、給金と云ふ事もなく、内室の着おろしの小袖など、時々に貰ひ、不自由にも無之程に致し、召仕れしが、或時、娘の親又左衞門を呼び、其方娘も、はや廿一歳に成ぬ、相應の方聞繕ひ、縁付候樣に申され候へども、いまだ有つき申事遲くも御座なく候へど、今二三年も御召仕ひ被下候樣にと申候へども、其後、又々、右之通、主人夫婦被申候に付、首尾能、暇をもらひ、手前に引取、近所の心安き世帶持のかたへ、當分預け置、縁組の事を、娘に相談いたし候所に、いまだ年若にも御座候へど、四五年も奉公致度由申ゆゑ、奉公の口を尋るに、幸、島津淡路守惟久内室の方に、近習の女召抱へらるゝさたあれば、家からと云ひ、此内室は、薩州中將吉貴の妹子にて、武勇の女性と聞えある故、又左エ門娘も、心たけき女にて、大きに歡び、目見に參り候處、内室の氣に入、早速相極り、引越の日に至り、淡路守方より、迎として、輿添一人、中間五人遣はしけり、又左エ門方にて、引越の祝儀とて、吸物、酒など振舞けるに、駕籠の者、大酒いたし、奉公も仕廻不申内に醉過し、五人の中間、是もころづく斗なるに、其内に、足輕は、さほど醉もせず、森氏海手の屋敷より出て、御門前通り、將監橋を渡

り、新門前を通りけるに、醉まぎれに、五人の中間、藝者の駕籠をかく如くはしりて、つまづくやう、中もゆれて、乘たる娘も、氣のぼりしけるが、元來、酒ゆゑの儀と、了簡して居しを、足輕申、皆々、今少靜に舁候へ、乘たる女中、迷惑ならんと云ひければ、五人の駕籠かきたる者、腹を立、是程おもき死人をかくやうなる駕籠なるに、靜にやれとは、御自分かいて見給へと、馬のかけるごとく、かけたる故、女中も、惡口をむつとしたるが、是以て本心にて云ふにあらず、酒の上の事と、かんにんせしに、剰、召仕の下女をとらへて、町中にて、色々となぶりし故、駕籠の内より、輿添に向ひ、しかり候へと申ければ、足輕、是非もなく、中間に申は、先程よりの仕方、餘り見苦敷、其上、御本家の御屋敷近所なるに、つゝしみ候へと、言ひしに、四人の駕籠かき、かつに乘り、しさいらしい云分、輿ぞへならば、女中斗、大切に番をせられよ、暫、是にて休足せんとて、芝新馬場の角に、乘物をおろし、休居けり、足輕も、今はせんかたなく、其方共は、事をしらぬ不禮者、御屋敷へは、はや四五丁なり、休足と云は何事ぞや、殊更、向は御本家の御屋敷、まどより、人も見るものぞ、急て駕籠をやらぬかとしかりければ、猶々、雜言を申けり、やむ事を

えずして、刀に手を掛け、眼を見出して、ゑかかりければ、駕籠の者、ゑせ笑ひ、其方の力よて、我等か切らるゝものか、ちと切て見よとて、尻をまくり、爰を〳〵と云ける故、足輕も、是非なく、刀を拔きければ、四人の者共、一度に取懸り、追取卷て、ちやうちやくせんとするを、ゑつ、おもひけるは、若、輿添を切らせては、主人の御名も出、御外聞も、惡しとおもひ、駕籠より出て、取さへんとすれ共、女の手には及がたく、其上、道通りの人々、多く立留りて、見物しければ、いよ〳〵、氣の毒におもひ、足輕に向ひ、あの者共切り候へと、せきにせいて云ければ、足輕め、是非なく、一人に、手を負せければ、殘り三人、ちり〳〵にこそ迯失たり、其内に、柳生備前守、片桐志摩守、織田伊豫守、此三ケ所、組合辻番、出で、是をおさへ、捧を持て、言騷ければ、其時、ゑつ申は、いづれも騷ぎ申されまじ、私義は、島津淡路守奥に相務候女にて、今日召れ候、中間共、慮外なる義御座候間、輿添に申付、斯のごとくに候、當人は、私女に御座候へ共、御番所の御法式は、相背不申候、落着仕候迄は、いつ迄も罷在候、必々、何れも卒忽被成間敷候とて、爰は往來の事よ候、御番所に入候て、御差圖を相待可申候とて、三ケ所の屋敷より出候役人へも、挨拶

などいたし、駕籠の内に罷候脇差、うちかけの下にさし、小褄高々と取、少も臆せず、番處に通りたる有様、三ヶ所の役人、往來の貴賤まで、さて〳〵、落着たる女かなと褒しも理り也、勿論、島津氏の方へは、三屋敷の役人より、此樣子、具に申達し候、本家島津よりも、役人、足輕、數多出しけり、公邊の場所いかがと、一家の事ながら、家來の者共、立會事にも不及差扣罷在候、淡路守留守居役の者、早馬にて罷越、上屋敷の役人へ對談いたし、扨、各、立會、中間の疵を改め、其後、女中へ尋候へば、ゑつ、手をつき、撿使に向ひ申候は、私、此度、島津淡路守へ召抱られ、今日、屋敷へ引越候に付、私迎として、足輕一人、中間五人、差越候所に、此者共、私方にて、酒を給さしゝに、其酒に醉、道すがら、色々不理屈を申、其上、難言など申、かんにん成がたき儀共に御座候へ共、元來、酒に醉候事と、隨分了簡致置候へども、段々と不屆なる仕方に付、輿添の足輕、見かね、叱かり申候へども、彌慮外を仕、私乘物の重きとて、死人をかつぎ申やうなりとて、雜言仕候に付、堪忍いたしがたく存候へ共、女の、はしたなく、とやかくと問答もいかがと、重々、用捨の上、剰、召連下女迄もなぶり、道すから、町中もかへり見ず、不埒を致し、輿

添、見かね、しかゝり候へバ、猶、かつに乘、聞入不申、是にて休可申抔申、駕籠をおろしける間、輿添申は、屋敷へも程近く候間、急行樣に申候へど、聞入不申、輿添も、きのどくの餘り、おどし見可申と、刀に手を掛申候へバ、散々惡口仕、四人、一度に取かゝり候間、私義も駕籠より出候て、とり分見申候へ共、血氣の若者共、中〳〵、手に及び不申、右輿添に疵付候而は、いかゞ、御主人の名も出候間、何卒、今少の内の儀と云、おんびんに仕度存候内、輿添をちやうちやく仕候躰、もだしがたく、輿添に申付、切らせ候へど、殘り三人、逃失申候、勿論、今日一日は、私へかし人の儀に候へバ、家來も同前と存候に付、如此申付候、其外、何の子細も無御座候、撿使に挨拶し、扨、屋敷の役人に向ひ、只今、御撿使へ申上候通、相違無御座候、御役人中迄、被仰達可被下候、私女の儀に御座候へど、公邊の儀存不申候、とかく、殿樣、御外聞の惡敷無之樣よ、御差圖可被下候、若、私女と思召、御用捨被成、咎もなき輿添の者、罪に被仰付候而は、私身にとり、本意に無御座、數多の御屋敷へ、御世話をかけ、其上、往還にて、ケ樣成儀仕候故、御咎も可被成儀に御座候へバ當人は、私に御座候間、いか樣とも、御差圖次第に可被成儀と、辨舌、水の

流るゝごとく、男も及まじき落着、類ひなき女と、皆、賞嘆いたしぬ、始終聞屆、委細書付、中間不屆の上、其元、差圖にてきらせ申候へバ、事猶相濟、其元、何の搆無之儀は、一通り承屆申迄の事、此上は、御座敷の御定法に可被成候とて、撿使は歸りけり、夫より、死人も屋敷へ引取、役人、ゑつを迎歸り、再三吟味の上にて、ゑつ儀、何の搆無御座申付有之也、淡路守夫婦、右の趣聞屆、女に稀なる落着たる取沙汰、しんめうなりと、甚賞美し給ひ、右に付、給金にも加増有之、女中頭になりて勤ける由、大力勇力の女有しかども、かく、落着たる女も、また稀なり、男の役をも勤べき女也、一ッは、内室の武功をきゝ及びて、此家に來りし女なれど、さも有べきにやと、有時、淡路守夫婦、但馬守三人、一所に居給ひ、ゑつを呼出し、尋被申は、其方、いつぞや、途中にて、難儀に逢し節、無據、口惜しく思ひつらんと有しに、御意の通り、甚迷惑仕候、責て、御上の御外聞惡敷成不申樣にと、其事の、氣の毒に存奉り候と申けれど、奥方聞給ひ、其節、其方が才智、三家敷の家來への挨拶、撿使への口上、委細聞屆たるに、男には勝りたる、甲斐〲敷生付との給ひけるに、ゑつ承り、左樣には無御座候、私智惠と申にてはなく、皆、御威光を以て、口

上も出候事に御座候、只、口惜しさは、女の身にて御座候、先此の儀も、いかほど、酒に醉候とも、主人分の者、男にて候へバ、あれ程の事も無御座候、さて〳〵、女の身ほど、是非もなき事は無御座候、既に、十年已前、赤坂邊御大名の女中のよし、雜司ヶ谷參り歸り候折から、赤坂の方へは不參、中野村と申邊の、人ゞあれなる所へ連行、足輕、中間、已上六七人にて、其女を、丸はだかにし、小袖雜物も、悉く取、松の木、杉の木抔へくゝり付、行方しらず欠落いたし候、強く詮儀有ては、結句に、御主人の名の出候事故、其通り被成候由、か樣の儀承りても、女の身ほど、口惜しきは無御座候、かく、下々に、恥辱をあたへられ候て、やう〳〵と歸り、往還の諸人にも見られ申事、一分も立がたくなれども、力に及不申候、是に付ても、女成とも、武士の、家に居申候者は、腰物をさし可申事と奉存候と語りければ、内室聞給ひて、成程、其方が申ごとく武家に生るゝ女、いかで、腰物をさす事の遠慮有べきや、其方は勿論、女共の内、心有ものは、申合、向後、大小をゆるし可申、乍去、人まへ斗のかざりのやうに存候者は、いらざる事也、腰物をもさすべきと之有女ならば、其身の魂にも、腰物をさゝせてこそ、本意なるべけれと有事也、其已後

は、島津の家にも、大小を差女中も有し也。

家政

看護法捷經（三十二）

三笠舍主人

第四編　常に多き病の心得方（つゞき）

（四）衄血

一衄血は、強く逆上せし時、若くは、夏日炎天を犯して、劇しき動作を爲す等の際に、與る事多きものあり。特に、身の弱きものよりは、强壯血多の人與りやすし。
又、人によりては、其體質、天然ゟ甚だ衄血し易きものあり。

二衄血は、通常は甚しき危險のものに非ずと雖、時として、多量に出血して、止まざる事有り。故に、下に掲る方法を施すも、止血せざるか、又は、最初より、出血多量なる時は、下に述ぶ手當を爲し、醫の診を乞ふべし。

三血衄を發するものある時は、先づ着服をくつろげ、特に、飾襟、及紐、等を除き

て、後、淸淨の處に安坐せしめ、衂血せる鼻孔より、淸淨なる冷水を歠入せしめ。之と同時に、同じ冷水を、鼻上、前額、及、顳顬に灑ぐべし。此くする事、暫時にして、患者稍、冷涼を覺ゆる頃、更に、冷水を飮ましむべし。此法にて、通例は止血する也、又、塲合によりては、手指にて、兩方より、鼻翼を撮みて、暫時鼻孔を壓閉するか、又は、綿にて、鼻孔を栓塞するも宜し、或は之等に兼て、項部に冷水を灑注ぎて、効あり。

四 此等の法を行ふも、止血せざる時は、淸淨の冷水中に、酢、又は、明礬を加へて、酢は直に水に滴すべし、明礬は塊りのまゝ、水に混すれば、程なく溶るなり、水五合に明礬凡そ二分五厘位、酢は二十四五滴の割合にて、混ずべし)前の方法にて歠入れしめ、又は、硝子、若くはゴム、の注射器(水鐵砲)にて、是を鼻内に注入すべし、此時は、兼て、佛膠散を内服せしむるを良とす、其他、兼て冷水を、鼻上前額、等に灑ぐ事、前方に同し。

五 衂血を發したる時、體を俯し。頭首を前方に屈して、噴鼻し、又は、妄りに鼻上を壓迫し、又、布片、其他の物にて、鼻邊を拭ふなどは、皆、害あり、決して爲

べからず、成るべく、頭首を直立の位置と爲し、吸氣を努めて、深く長くし、体を靜かに保ち、兼て、兩臂を擧上る時は、止血を助くるの効あり。

六 衄血止りて後も、暫時は成るべく、温暖の飲料酒類等の飲用を、避けしむべし。

(五) 鼻感冒附咳嗽

一 鼻感冒は、最も多き病にして、鼻内の粘膜、赤く腫れ、鼻道塞がりて、鼻根と眉間との深部に、一異の感覺ありて、噴嚔を催ふし、初めは、多量の稀薄なる鼻汁を漏らし、漸くにして、其汁稠厚と爲るなり。

二 此症に罹る時は第一發汗を促すを良とす、其法は温湯、若くは温牛乳、温葛湯、等を多量に服せしめ、又、外方よりも十分温保して、發汗を促すべし。或は、薄荷葉、又は、「カミルレ」葉の、浸劑を用ゐるべし、注意して身を冷すべからず。

三 鼻感冒進む時は、次第に咽頭、喉頭、氣管、猶、甚しきは、肺にも波及す、喉頭に及ぶ時は、其部燥きて、瘙痒の感ありて、咳嗽強く、時としては、聲嗄れ、胸部に痛を覺ゆべし。

咽頭燥痒を覺ゑて、且、咳嗽あるものは、頸の圍りに、冷水纏法(前編に出)を行ふべし。

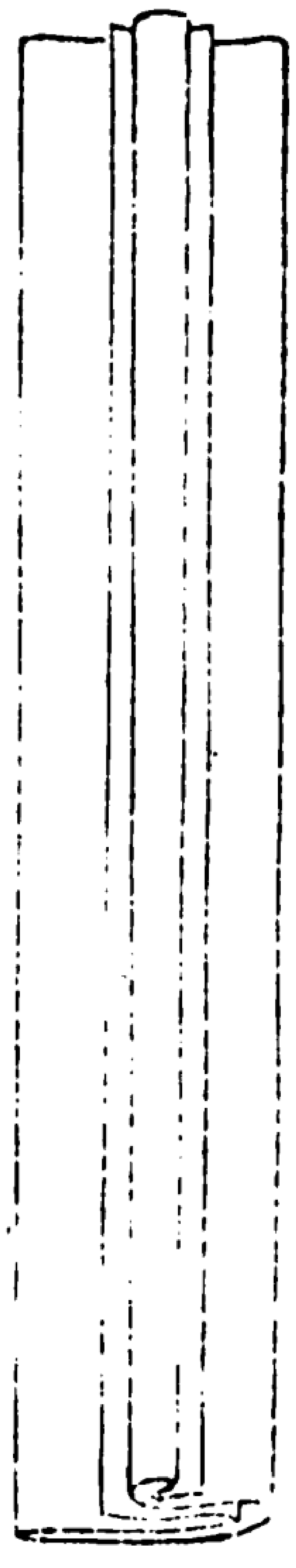
四 總て、咳嗽の續くは、呼吸逆に、慢性の病あるの徴なれど、輕々しく看過せずして、醫の診を乞ふべし。

折形（九）

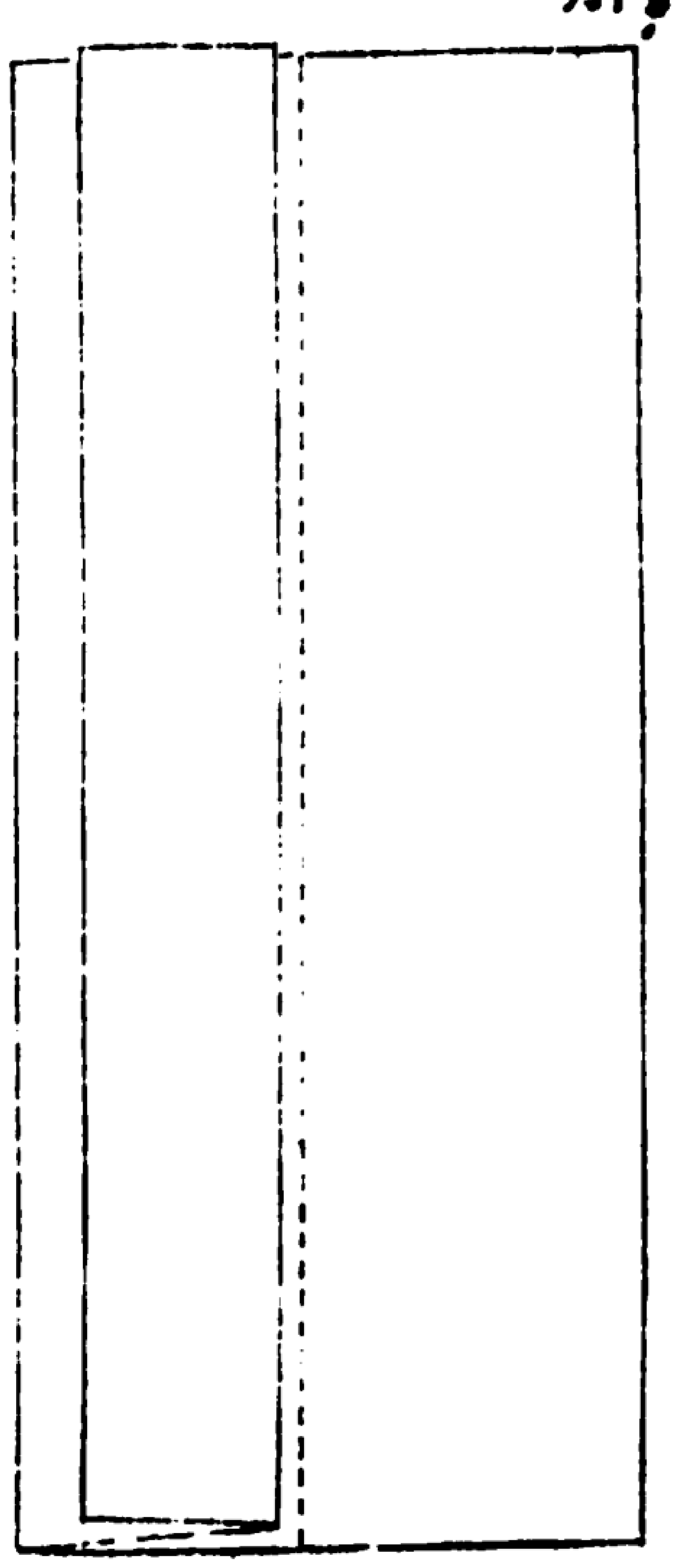
有住齊

短冊包、

水引掛、書付なし、

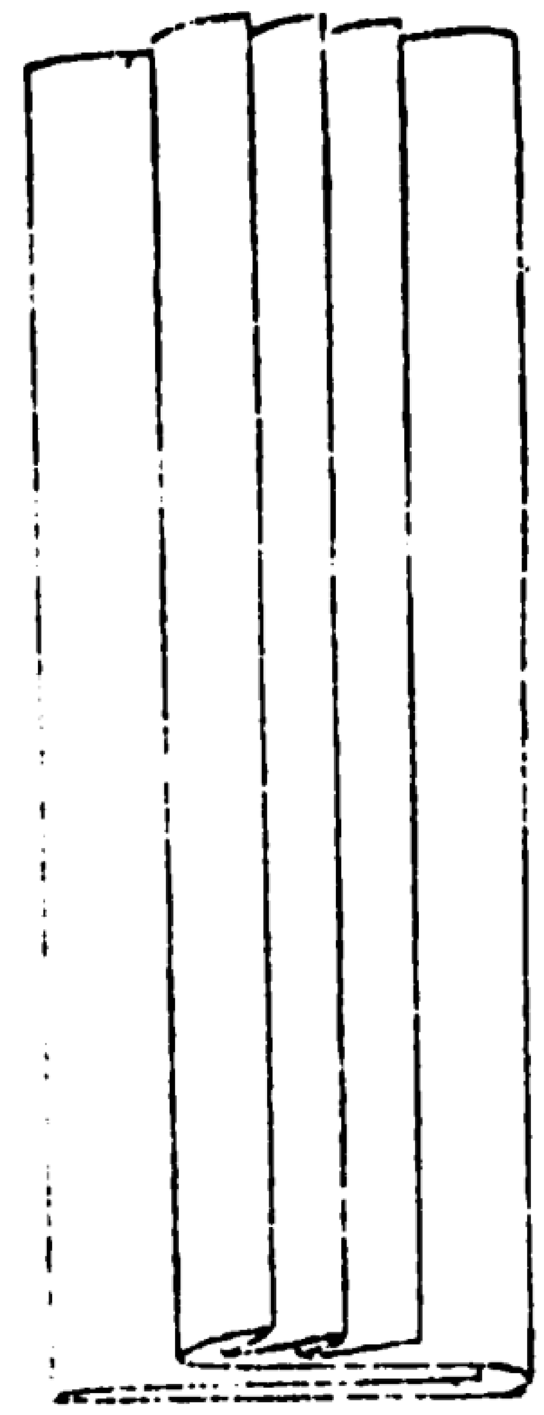


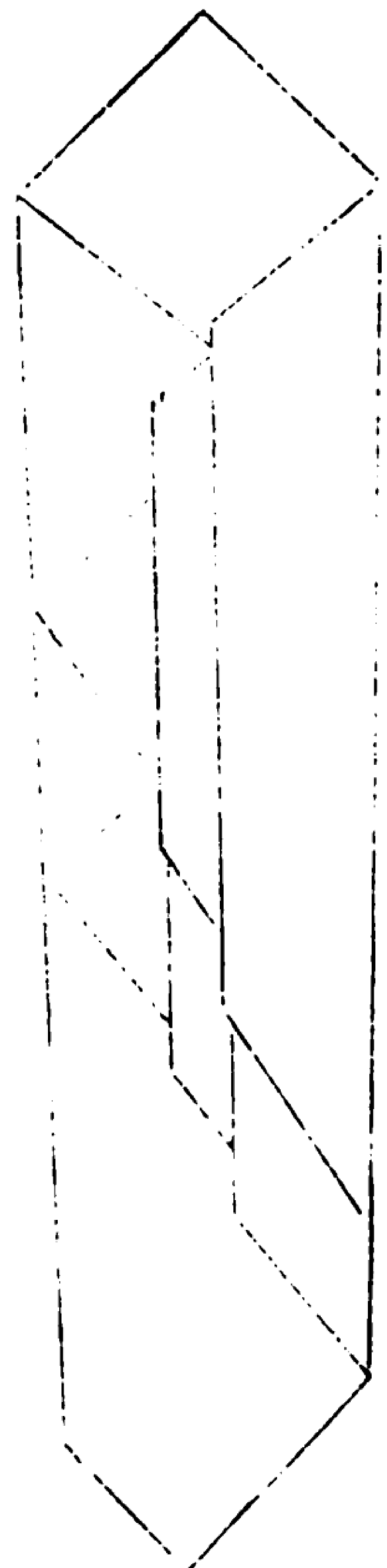
解



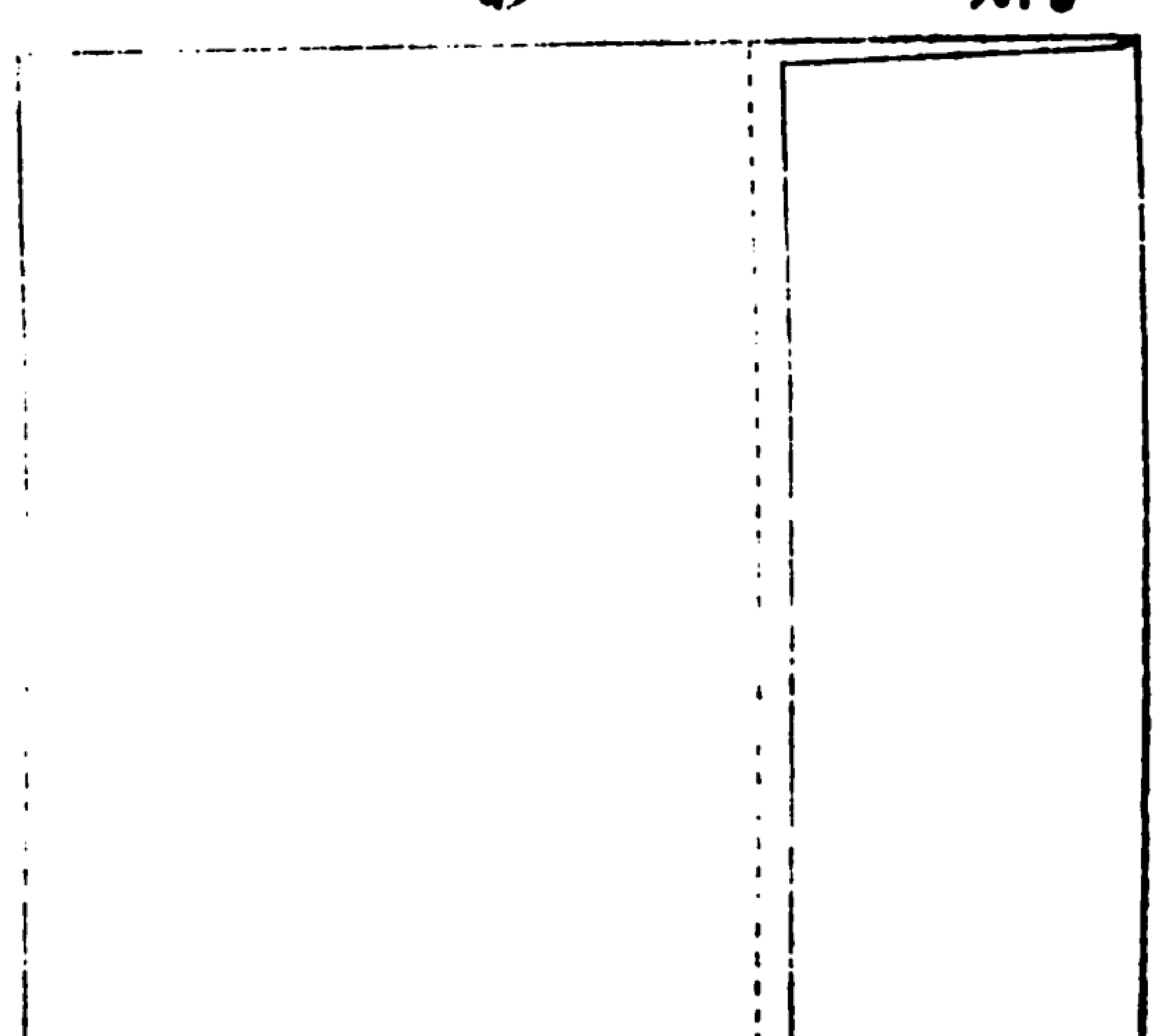
一 服紗、茶巾、莨入包、水引掛、書付もあり、又、水引なきもあり。

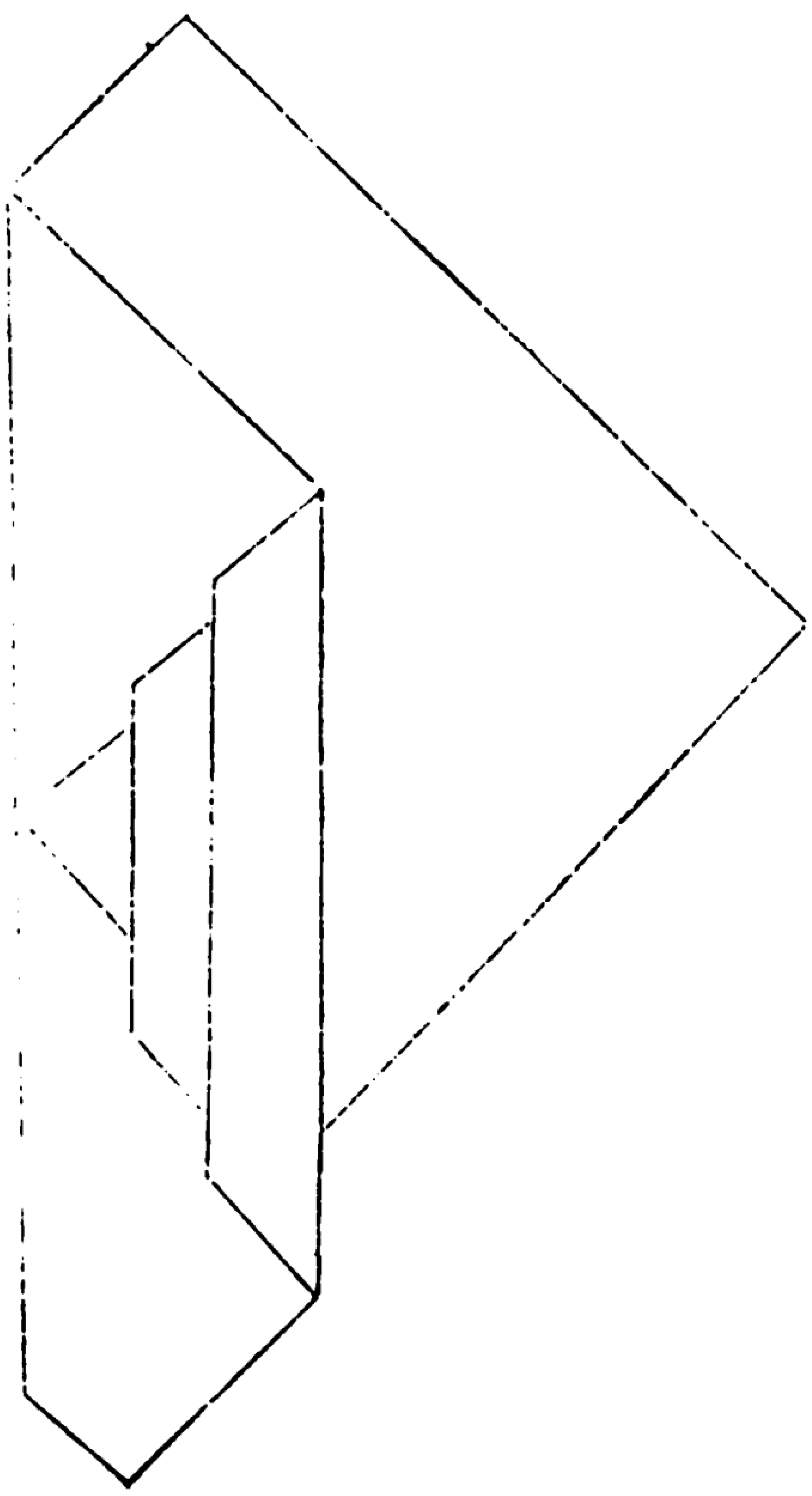
一笄、小刀、茶杓、匕包、書付、水引わり、下包あることもあり





解





漫録

沖繩縣下旅行日記

まに〳〵庵主人

廿六日　朝疾くおきいでたれど、頭いたく、目さへ腫れたらむやうに思はれて、心地あしかりければ例の朝食すまして、又、枕につきぬ、さすがに朝日さしこみ、學校も隣りたり、若しあらぬさまなどしたらむには、生徒の見るめも苦しかめれどど、いもねむられず、携へもて來し書どもうち見やれど、物うく、これはたかいやりすてゝ、唯、目ふたぎて、よろづよしなしごとを思ひつゞく、正統記に、仁德を大鷦鷯尊と申し、第八の御子を隼別と申しき。父天皇の御時に、兄弟戯れて、鷦は小鳥にて、隼は大鳥なりと、爭ひ給へることあり。今かく隼別の御末世を保たせ給ふを見れど若しは隼の名に勝ち給ひけるか、名づくることも愼み重くすべきことにやと。見ゐたりき。さればよ、この縣の人々も、始め、この島に來り住みける頃は、明かに天祖天孫の御末なりとて、天孫氏といひ遠つ御祖の御德をゑるしおきけむを、いつのころよりか、驕る心いできて、よしそは一時の權略なりしにもせよ、王などいふふさはしからぬ名なのりて、耻ともせぬやうになりにしより、遂に

はおのが祖先さへ、忘れはてぬ。あはれ、今の陛下の畏きあつき大御詔のなからましかば、言語習慣の異はもとより、少しの因縁もなき國々の人くに、奴とせられて、虐げ使はれけむ、あなかしこ。分にすぎたる名などは、ことに／＼、愼みいましむべきことにこそ。王といひし昔をかへりみよ、枕を高くせし日やはありし、今日は淸國の使來れり明日はやまとの船入らむ、献上物の用意、饗應の準備、これらは定りたることゝして、あきらめもせらるべし。させば機嫌をやそこなはむ、かくいはゞ、怒にや觸れむと、その度ごとに、固より多くもあらぬ金錢を、かきあつめての賂沙汰、これにても、猶、澁き顏もやせむかと、心を安むる時はあらざりき。かゝるが上に、國には遊者多く、農民の膏血を以て、おのが衣食を華美にす、農民は、唯、前世の因業にて、かゝる憂き目を見ることゝ、覺悟したりけむかし。始より、琉球守などいひて、治めたらむには、かゝる苦もなかりけむを、あはれ。又この頃の人の中には、琉球語などいひて、この縣の言語をぞ、一の國語をなせるものゝやうに、心得たるもあるめり、いみじき僻ごとぞ、これをしも、一の國語といはゞ、東京、大坂、さては、それと、いみじうかはりたる言語を用ゐる、鹿兒島、青森なども、皆、別々の國語をもてりといはざるべからず、さいへど、既に方言といふ實は聞えたれど、猶、國語などいひ聞かすより、わが所謂國語とは、別のものゝやうに、ひが心得するあさはかものもあるぞかし、又、この

民の愚昧なるに乘り、强ひて、嚴めしげに搆へて、恐怖れしむるは、いとわろきことなり。鼠の遂に猫に順ひたるを聞かず、恐怖るゝものにいつ何物か順ひたりし、侮らむかとあやぶむならば、よろしく愼ましむべし、愼といふことは、いづれの世、いづくの人にもあることをや。昨日は數多の人々に禮せられたりき、うやまひとか親みとか、何のわれらぞときに、又、何のわれらが何わざすとも、知らぬものが、唯、內地人と見たるばかりにてよ、女なぞは、そのゝきたるさへありき。かゝるあはれなる民は、いつ如何なる時か、所謂同胞と知りて、內地の臣民と親みむつび、共に、忠をいたさむとする、あはれなることかなと、淚をおとしたりしことなどさへ、思ひいだされて、

いよ〳〵腫れいたむ心地す。せめて、晝飯したゝめたるころは、既に、二時なり。恩納山明日にもならむ、明後日の道いと堪へがたからむ、とまれ、徒に煩悶して、日を費すべきことかと、案內者を傭ひて登る。六十歲あまりにやなりぬらむ、足も疾からず、山路には中々たのもしきつれなり。中腹に至りし頃より雨降る。小竹兩側より、往來の上に茂りあひたれば、雨はかゝらねど、葉末よりしたゝる雫にて、着物もしとゝになりぬ、老人の身のいとこそと傘をやりつれど、肯てとらざりき、十分ばかりありて晴る、雫うちはらひつゝ先立ちゆくさま、いとたのもし。路はいよ〳〵嶮しくなりぬ、渴することいみじ、さすがに着物をしぼりて飲まれもせず、こゝらわたりに水のあら

ばと、切にたのめるけしきを見てか、遂このさきに水あり、そこより絶頂までは、三合に足らずといひて、腰なる刄物とり小竹を切りてゆく。やがて、こゝ少し下りたるところにて候ふ、これにて飲み給へとて、節の間より切れるを出す、ゆきて見れど、溪の岩間に水少しあり、老人のなさけにてすふにいと冷しく味よし、いかなる、甘露もこれには若かざらむ。

かゝる時はいのちとたのむ石淸水
　　かみのむすびしあとならなくに

坂もやすき心地せらる、絶頂につきたりとのことなれど、草木しげりて、いづくも見えず、そこなりける高き樹に上りたれど、海つら少し見ゆるばかりなり。人に難義かけて、こゝまでやう／＼來りつるを、さりとても、見るやうあらむと、しばしうちあんじたれど、ぜむすべなし、よしなきことしてけり、歸路もさきの坂なるべしなどつぶやきて、下るれば、老人、薪一把肩にもたげて出で來り、いざこれより東の方にまゐらむと、さきにたつ、少し下りたるところに薪うちおき、脇道に入る、一二町ゆきたるところ、即ち、そのところなり、こゝにても、又、木に攀づ、何見ることかと、力なくも上に至れば、こたびは、眼も晴るかなり、國頭のはてまで一目に見ゆ。やがてゆかむずるぞと思へば、いとゆかし。かへり見れど、島尻まで又、一目なり、かくして見れど、遠くも來にけるかなとそゞろに驚かる、この島のけしき、二目にて見盡さる、うれしかりつること、いざかへらむ

とて、下るれど、又、一把かつぎて出で來りぬ、兩肩にもたげてやゆくらむ、便なきことよと思へるに、もとおきし所にこれをもうちおき。林にわけ入りぬ、又や薪とるめり。刃物のおと聞ゆ、あはれ、さすがに、少しぼけたるならし、あの衰へたる体にて、いかで三把かづかるべきと、あはれがりし間にいで來れり、手ごろなる木の、兩端尖せたるを持ちて、即ち、一把づゝつきさして、かづきもて下る、かゝることとなりける。かまでもわがとも貧しきものゝいとなみ用意こそ、いとほしけれ。いかなる　にすむやらむ。それはさて絶頂の木の上によち上りて、そこら見わたしける、いかにうとくしかりけむと、うら恥し。舊藩のころは、物見の臺をすゑおきけるよし、さもありぬべきことなり。今宵は、舊の十四日なり。月いと清し、その光の松ゲ枝のしげきが中を洩りて來るさま、小波大波の岩かどにくだかるゝが、松吹く風に送られて來るおと、總べて、あはれなる夜なり。こゝにはかねて、知られたる、唐人徐萊光の書をかく、松月有餘鑒の五字なり。私に次ぎて曰く

松月有餘鑒、風波聲絶ゆることなし、予をして李白ならしめバ、徒にやはすごさむ今夜の情

道のしをり歌合（六）

久志本常幸寄贈

なき名ぞと人にはいひて有ぬべし
　こゝろのとはゞいかゞ答へん
身の果よいかにかならん人しれぬ

　　こゝろにはづる心ならずど

身をおこなふに、みづから省み恥らひてこそ、獨をつゝしみ、意を誠にするの道には入べけれ。日に三たび、身をかへり見るとの敎も、此ためぞかし。すべて、心のまもりやう、いやしくも、正しからざるわざは、かりそめの事にも、恥をおもふべし。する墨のゆがみ、ぬぐ履のそろはざるごとき常につゝしみ守らざれど、ならはしみだりになりて、心のさだまらざるさまをあらはす、恥ざらめやは。

梅のはなよそながら見ん吾妹子が
　　咎むるどかり香にもこそしめ
たちよれど袖も色づくもみぢ葉の
　　かげゆく道をひとやとがめん

人のうたがひを避るのたとへ、瓜田に履をいれざるのいましめになん。

女郎花おほかる野べにやどりせど
　　あやなくあだの名をや立なん
はなずゝき穗にいづる秋の夕暮は
　　まねかぬ方にすぐるものかな

男女のあいだめは、人倫の大義なれば、殊に、おごそかに、遠ざかりつゝしむべし。わかきやもめ、なまめけるいもがりなど、いふもさらなり。

しら雲とあだにもいはじ山ざくら
　　よそに見る名の立もこそすれ
あしがものおりゐる池の水なみの
　　たつことやすき我名なりけり

世にうき名ばかりたちやすきものなし、かへすがへすも、おそれみつゝしまざらめや。

みちのくにありといふなる名取川
　なき名とりては苦しかりけり

なきことを磐余の池のうきめなは
　苦しきものは世にこそありけり

よく心して嫌疑を避ざれば、此悔をまぬかれず。

むらさきの色し濃ければ藤のはな
　松のみどりもうつろひにけり

をみなへしかげをうつせど心なき
　水も色あるものにぞありける

水の方圓の器にしたがひ、人は善惡の友によるとなん。わが心、ましはる人につれて、よきにもあしきにも、そまりやすけれど、あしき友には遠ざかり、よき人にはもとめて親しむべし。

むかしたれひとの心をしらいとの
　染れどそまるいろになきけん

世の中に麻はあとなくなりにけり
　こゝろの隨のよもぎのみして

世にいかなる寶よりも、よき友こそあらまほしけれ。

しぐれふる音はすれどもくれ竹の
　など世とともに色もかはらぬ

いかなれど同じ時雨にもみぢする
　はゝその森のうすく見るらむ

朱にそまれは赤くなる、墨にそまれはくろくなるとは、いへど、たゞ上智を下愚はうつらず。

いかにせん直にはゆかで足がらや
　横ばしりするひとのこゝろを

風あらきとさのみなとをこぐ舟の
　苦しきものはこゝろなりけり

人たるものゝ、かならずゆくべき、正しき大道のありながら、いかなれバ、よこさまにさまよひたどりて、あらぬ方にそれゆくにや、げに、人の心のけはしきこと、あから目もせずつゝしみてこそ。

波の上の月やなにはのよしあしに
　映るこゝろのためしなるらむ

風はやみ峰のくず葉のともすれば
　あやかりやすき人のこゝろよ

善にすゝむははか〱しからず、悪にはすゝろにあやかりやすきものなれバ、殊によかく慎ざらめやは。

折ふしもうつればかへつ世の中の
　ひとのこゝろの花ぞめのそで

紅はうつろふものぞつるばみの
　なれにし衣にあきしかめやも

心の物にうつりゆくは、みれんのわざなり。わきて、をうなこゝろの淺はかなる、世のはやう事におもひつきて、今めいたるさまをこのみ、むかしびたる事をすてゝ、しきりに、新奇の風にうつりもてゆくは、いとはしたなし。

花ずゝき穂のいてやすき草なれば
　實のならんとは頼まれなくに

なゝへ八重花はさけども山ぶきの

寶の一つだになきぞかなしき

はなずゝきは、口はしたなきものゝたとへ、やまぶきは、詞の花のみにして、心にまことなきものゝさまなるべし。

ちりかゝる紅葉の色はふかけれど
わたれはにごるたにがはの水

くみてしる人もあらなむなつ山の
木のしたみづは草がくれつゝ

かたちばかり、人がましく、まことしやかに見せかけて、底の心のさもとなく、たのもしからぬは、なにゝかはせん。たとひ、うち見たる所はつたなくふつゝかなりとも、たゞ、實義ふかき人とぞ、眞に人の人なれ。

へだてゆくひとの心のおくにこそ
またしらかわの關はありけれ

音羽川などりておつるさみだれに
みづの心の見えずもあるかな

むねの中にかけでありて、うちとけざるものは、こゝろおきせられて安からず、いときたなき心さまなり。

淀川のよどむとひとは見るらめど
ながれてふかき心あるものを

難波がた何にもあらず身をつくし
深きこゝろのしるしなかりそ

みだりに人をあなどるは、不德のわざなるべしその心ざしのほどを見ずしては、たやすく人は論ずまじきものぞ。

みやま木のその梢とも見えざりし

さくらは花にあらはれにけり

雪ふりてとしの暮ぬるときにこそ
　つひにもみぢぬ松も見えけれ

時しあれば徳はあらはるたとへなるべし。

おほそらをてりゆく月し清ければ
　雲かくせどもひかりけなくに

谷がはのながれし清くすみぬれば
　くまなき月のかげもうかびぬ

人はいかやうにいひなすとも、心だにくもりなくは、つひには其誠あらはるべし。たゞ、運命を天にまかせて、時をまつべきことになん。

しら川のしらずともいはじ底清み
　ながれて世々にすまんと思へば

世の中のひとはなにともいはし水
　すみにごるをば神やしるらむ

たとひ、身はいかやうになるとも、心は天地神明に誓ひて、かくぞあるべき。

深き夜の露ふきむすぶこがらしに
　そらさえのぼるやまの端の月

しぐれゆく四方の木の葉の秋風に
　ことぞともなき松のいろかな

忠臣のみさを、義士のこゝろざし、時勢のおとろへゆくにたゆまず、大節をしのぎて、いよいよゆゝしきさま、臣として君につかふまつらんは、たれもかくこそあるべかりけれ。

人の立ち振舞ふべきやうにて品の程も心の底も見ゆるなれば人目なき所にても疎濫な目さ心得て打ちさくまじきなり

（竹馬抄）

井蛙小錄

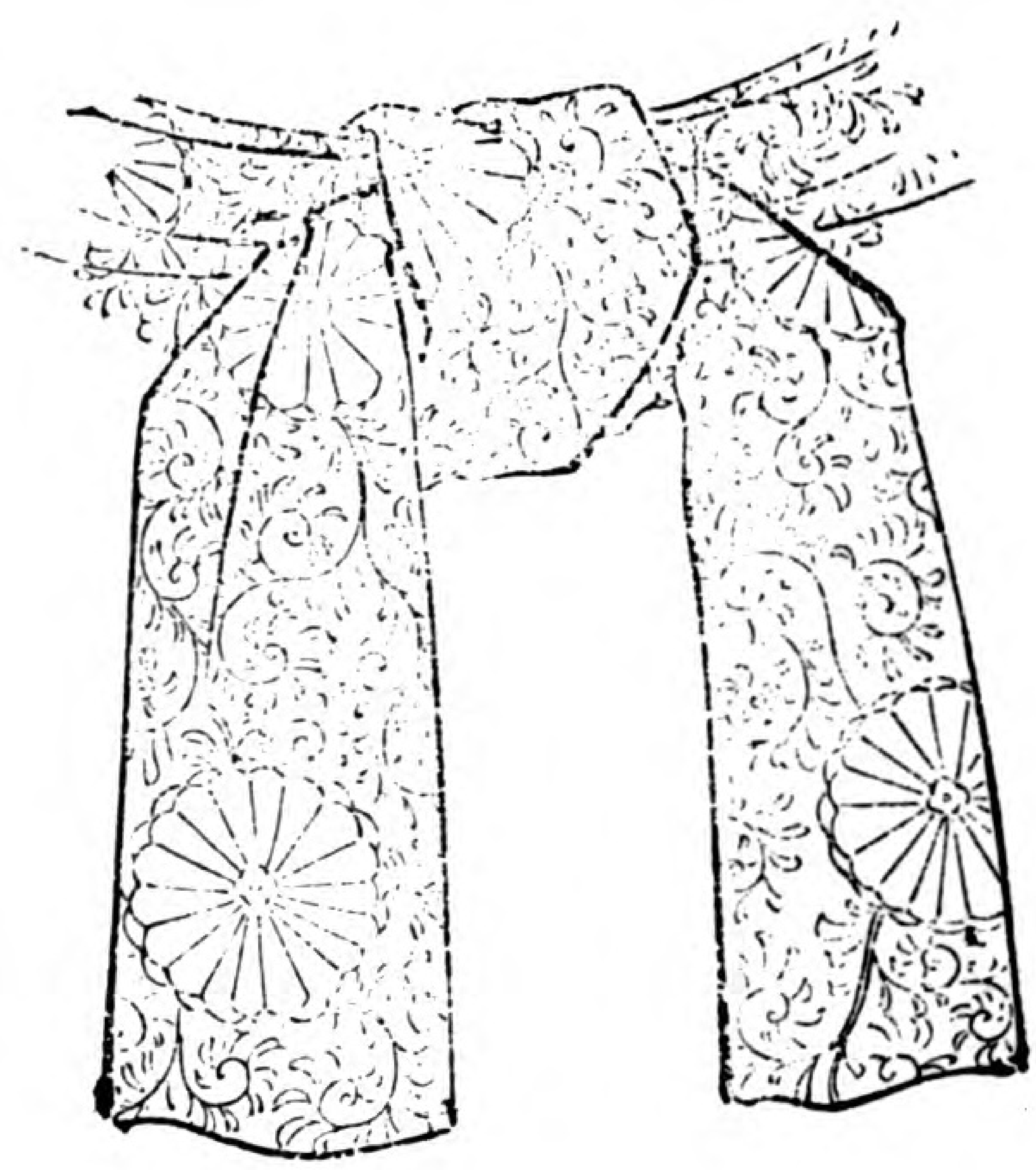
井上頼文

帶のむすびかた（文化年間刊本、都風俗化粧傳所載）

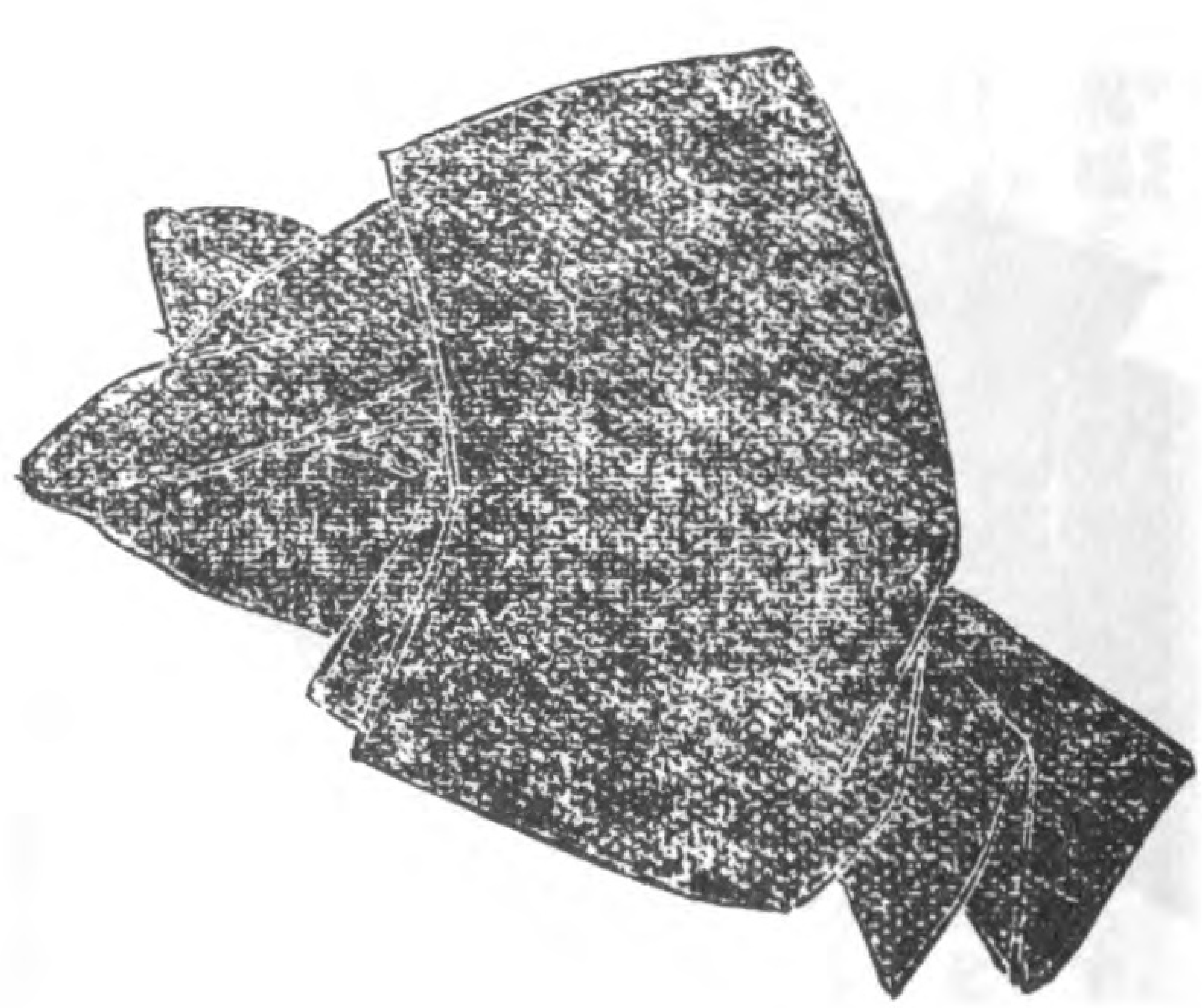
帶巾の廣き狹き時々に變り、或時は巾の狹きを好み、或時は巾の廣きを當世風なりとす。結び樣、又其時々に變れり往古は知らず延寶の比迄は、すべて男の帶結びのごとく、四角にむすび、是をかるた結びとて、專流行しか、其後上村吉彌といへる妓者が帶の結びやう恰好よしとて、專ら此風變れり、これを吉彌結びと云ふ、其後年々好みに志たがひ、數多の結びやうあり。女の前帶することは、明暦万治の比祇園淸水の茶店女、參詣あまたある時は、帶のとけたるを結びて、後にまはすいとまなく、前にてむすびたるまゝ、茶酒の給仕をせしが、他にうつり、島原の傾城茶立遊女もつぱら前結びにせしより、又町の女にうつり、專ら內室のむすび方となれども、大ひなる略義なり、ゆゑに今もつて御所方武家がたには、老若ともに前帶に志給ふことなし。

こゝに圖する所は、今專ら人のむすぶところを寫す。猶このむすび方より、其人その恰好によつて、其人に應ずるやうに工夫ありて結び給ふべし。

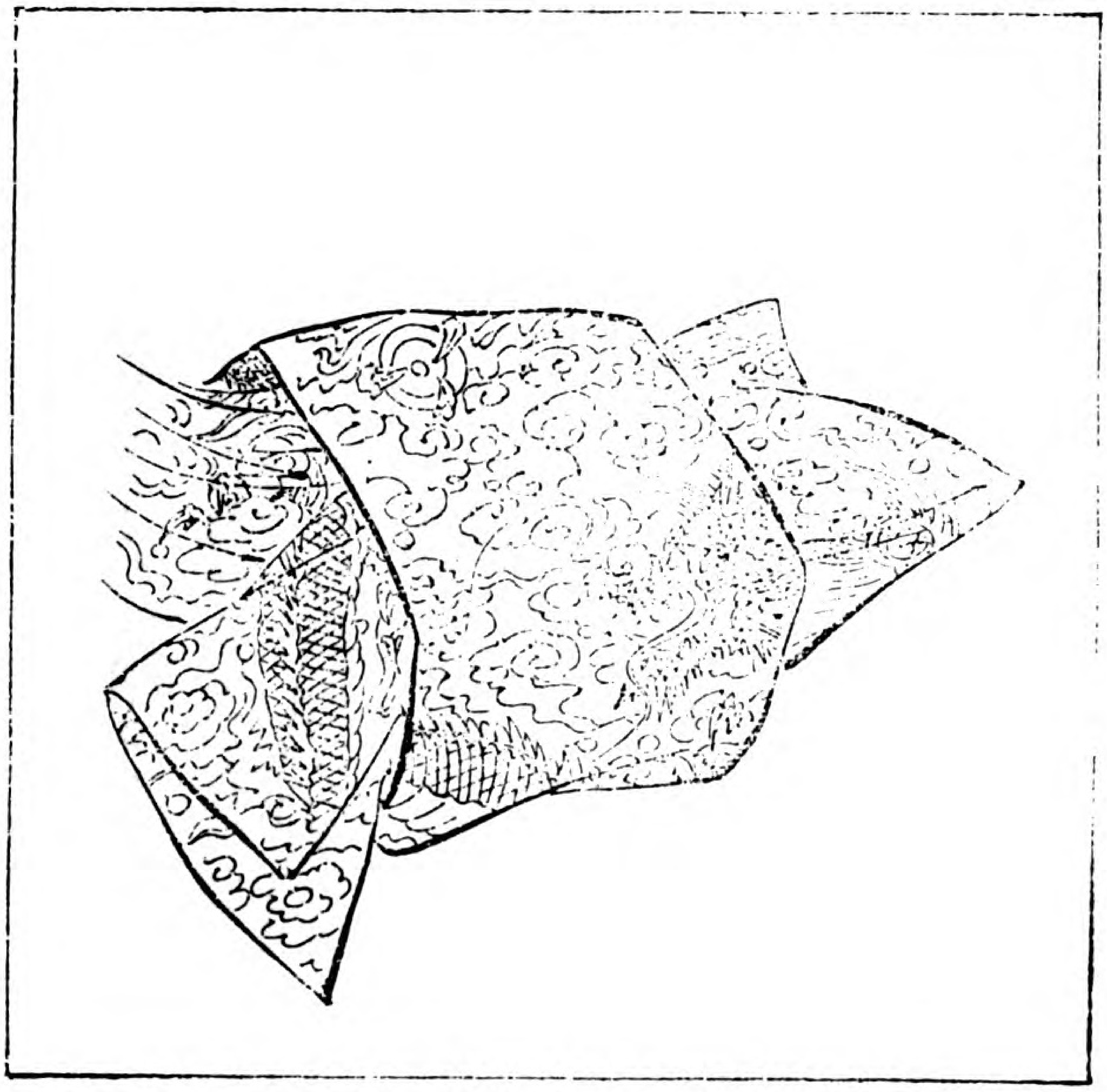
下結び



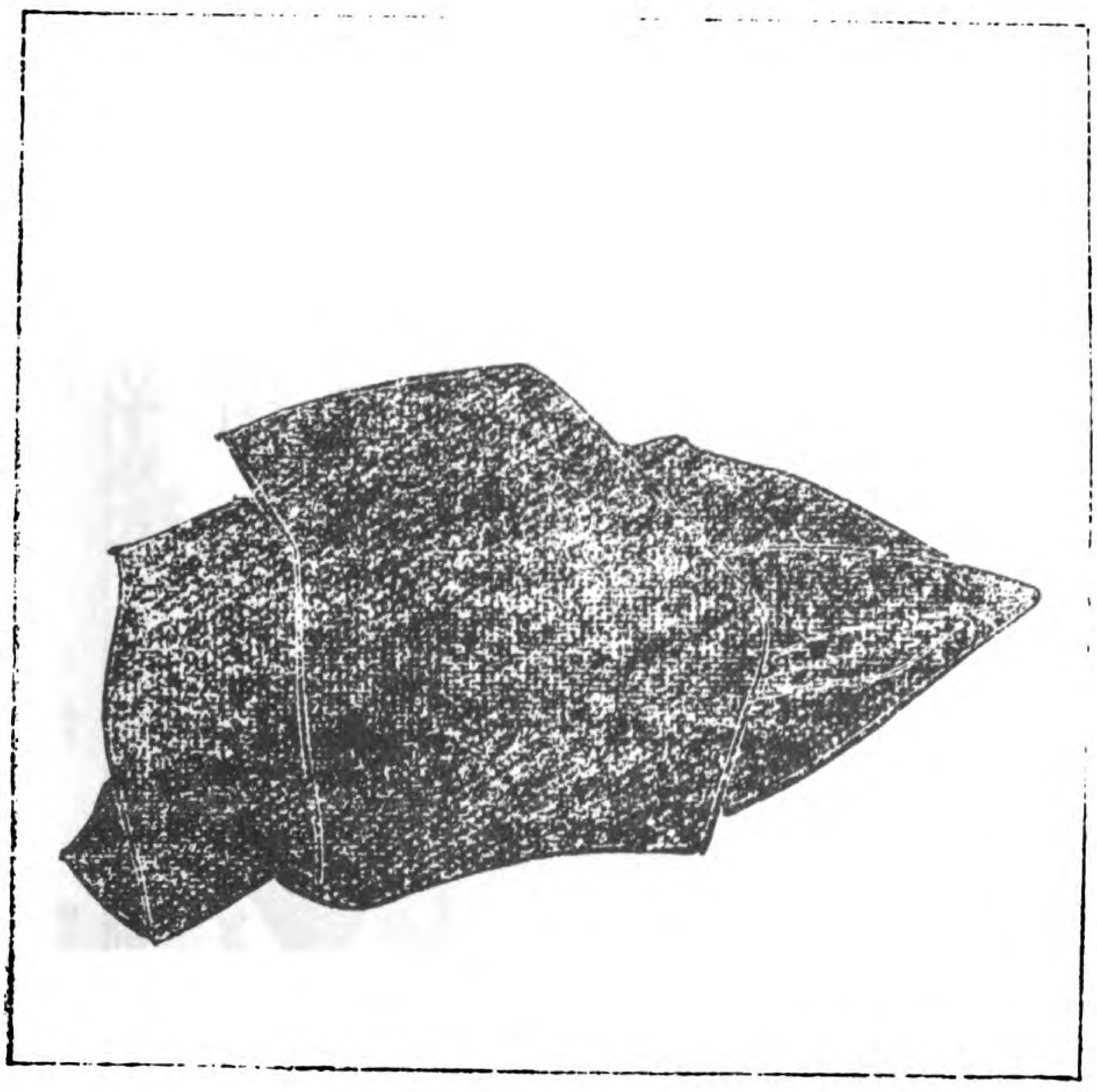
小龍結び



よしをむすび



路考結（ろかうむすび）



藻鹽草（承前）

一佛神信仰の事、それ、神明は天道なり、音もなく、香もなくて、五行おこなはれ、造化はかりにて、善惡邪正かゞみに、影のうつるがごとし。をして名をいへバ、日本は、國とたちのみことより天照大神をはじめ、奉る、靈神には、八幡大ぼさつは、應神天皇をおがめ、春日大明神は、此間不詳天滿天神は、菅丞相にてなします、和論語をみて、神の直をあをふぐべし。いづれのみちにも、神は、正直のからべにやどりたまふ、和國は、神の國といへど、先、たふとみあがめたてまつらでかなふべからず。

佛は、天笠にしやかむに佛とて、出生し給ひ、三世の因果をとき、生死不可思議の道を廣め給ふ。此ほとけの御をしへに、しやかより先〻のほとけの通戒とて、諸惡莫作、衆善奉行、自淨其意是諸佛敎の四向の文にとゞまれり、此文のこゝろをえて、異端とのそしりもあるべからず。佛法に入るには、戒定恵の三學也。戒は、身をおさめ、定は、心をおさめ、恵は、さとりをひらくにいたる、廣き法もんは、八萬四千のくちにあふれくわうきう修行は、三大あそうぎの刧をかさぬるともいへど、在家、今日の上に思ふ所は、五戒也、五戒、五常名をことにすといへとも、一つの信より、ともにならびおこなふべし。世人信心といふは、經よみ、念佛だいもくして、神ほとけ拜するのみをいひならはせり、これも、信心の一助ならぬにはあらず、仁義禮智も信に行はれ、佛法も信

を源として、内外とゝのふべし。神はわが善惡のめつけなり、ほとけは善をすゝめ、惡をこらすの師匠なれど、人にはいつはりかざるとも、神社佛敎に心のよこしまありては、かなひかたし、心だに誠の道にかなひなばいのらぬとても神は守らん」と、の御事なれど、信心の誠は、我が心のうちに有べし、然とも、佛神を拜し、經よみ書き、題目、念佛いたす事、おの〳〵、その妙力あり、則、我か心の邪をはらひ、正しきに歸する所なれバ、心がけて、をしへにまかせ、つとめ行ふべきことなり。これも、わかきとのたちは、あなかちにきらひ、そしりわらひ、かきやぶりにいひさまたぐる習ひこそ、さのみ心に神道をあきらめ、儒佛をやぶるにもあらず、儒にくわしくして、佛をそしるにもあらねど、人なみくちくせわる口いひきらふは、大かた、今の世に多くみゆるなり、若き内は、夫などの經よみ、かんきんなどきらふと云らは、隨分、めにたゝぬ樣に、云のひて心がけつとむべし。おもてに信心顏を出し、あらかひたがひて、夫にもよしなき謗法罪をつくらせ、其身も云んゐをおとし、つひには、夫に勝れぬ事なれバ、けく、信心も成がたき樣になす事不調法なる事也。おこ とも信者にてあらバ、幸の事、もしきらひて見は云ひてすゝむべからず。または、山河の殺生抔、すいふんこのまぬことなれとも、さのみあらがひ諫へからず、何とぞ外にうつるべき事より、をのづから度もすくなく成樣の心もちひを

致べし。能ついであらば、無益のせつ生なき樣に、いさめをも云べし。無益の殺生は、わがつねにいたむ處なれど、子さへ心にまかせねば、おつとは、猶更なり、せめて、てまへのとがなきやうに有べし。信心おもてへあらはすべからず。心に深く鏡とし、佛神へ向ひて、耻かしからぬ樣に、我身心を愼むべし。

一子をそだつる道は、我いまだ、孟母の誠をねず、善にみちびき惡をこらす事のいたらざるをだに恥る所なれど、筆をさしをくべし。よきいにしへのみちもとひ、よき親のならはしをもきゝて、手本とすべし。おやのこゝろは、此書にあらかじめしりぬべし。君々たらずとも、臣、以て臣たれとは無理といひし、家來のありしと

や、われ、不德のおや心にて、子は孝行なれとおもふは、猶、いひ成べし。親の心をやしなふは、實に、これ、孝子なり。山川、遠路はへだてたりとも、身治り、心いさぎよくて、ふさいとゝのひ、むつましからど、この上の孝あるべからず。なきあとまでも、かげに立そふ鏡のごとく、惡をなげき、善を悅ぶ心をせば、神明佛陀の照鏡にひとし、なんど、珍膳美味のくやうのたぐひならんや。追善の誠は、身を治め、家をとゝのふるにありと、しりたまふべし。この書は、人にみすべきものならねど、文法前後のづたなきをもかへりみず、くりことをかきならべ侍り、ちかきにゐては耳にしげく、遠きにありては、目にちかゝれと思ふのみ、あなかし

て。

享保十七壬子のとし卯月十八日書終

このもしはくさてふ草子は、享保の末、伊州の公族、新七郎藤堂良躬ぬしの母儀、淨珠院嵐子（同藩藤堂觀貢長看女四世新七郎嫡族之室）その愛女、須磨子のために、みそかにかきて、わたへられけん、（すま子は津藩執事藤堂隼人長勅之室）すま子深くひめもちて、まる人もなかりしを、いくほとなく、延享のはしめ、世をはやうせられてのち、かたみの手箱よりとうてゝ、そうかうも見、世にも聞ゆる事とはなれりしなり。この嵐子は。才德兼備の女丈夫と、其代にたゝゑ侍りしとぞ、ひとゝせ、國主少將高明君、はしめて、伊賀國になりませしをり、「この里に名ある紅葉のありときゝ」、といへる誹句を給はり、猶、希世の才なと讃美のおふせ言ありしは、こよなき榮花のことなり、その外、いひつとふる名譽のさたもあれど、餘はをしても知るべきをや。凡、身をまほり、家を治る、貞操方正の趣きは、この書面に見え侍り。良躬ぬしは、二歳にして父の跡をつがれ侍りしを、かたのことく、能く生したてつゝ、勢伊二國のものゝふのかゞみ成べきなと、君のたゝえもはべりしとぞ。さは家の風をも吹せ、その餘波ひまもつたふめり。すま子は、ひとりさちなくて、つまには先たゝれしか、猶、かしこき夫人の員にかぞへ、五ッの德に恥ざるのをうなとはいひける。これ、かのはゝ刀自君のいさを成べし。それ、女戒のたふとき、處女賦のめでたきも、わか國をみな子の

ためには此冊子のよめやすく、學安には、おかすかしと、人々、こひ寫し、もてはやる中にも、わきて、ひら松正懿うしの、ことさらにめでまとひて、凡、女の子もたらん人のたから。これにおくべからず、いかで不朽をはかり、公にせずやはとて、今の總教、長觀の主にこひ求めらるゝといへども、こは、閨中の秘書にして、廣く人のためにかゝれしにもあらず、母子の間の誠をもて、おかおもふまに〳〵に、筆にまかせてかいせられたる、藻汐くさなれど、言葉のとゝのはず、事のあやまりもあるべきなれど、その人に向きては、罪うべきわざなめりと、いなまれしを、なほあながちに求めらるゝ、そのこゝろざしのせちなるも、

またもだしかたく、門葉の人々にもいひおらして、漸くにうけうべなはれけるにぞありける、かゝるに、をのれか手してかき、かつ、つたはれる事の故よしをも、ついてよと、大人のもとめらるゝは、このふみにつきては、いさゝかゆつらふ譯もあれどなり、さらば、筆言葉のいやしくつたなきをも、はづべきかはとて、兎うつし、かうつゝりて、そのもとめにむくひ侍るにそこれ。

天保七とせひのえさるてふ彌生の末

神風の伊勢　あのゝつのとの人

八十一の翁山崎よしふる云

（をはり）

女畫師

其八

乙羽庵主人

其方が姓名はと問はれたる池旭、返答せんともせで、たゞ髪ふり亂せる頭を垂れ、言葉無く控ゆれど、大將は怒れる氣色も無く、床几を離れて傍近く進み寄り、持てる軍扇を笏に搆へて。こりや女子、其方が姓名は、はて名を何と申すのぢやと、優しき問ひ條に、此方は床しく思はれて、頭を少し擡げつ、頰にかゝる鬢の毛を小指もて掻き上げ、微にその人の顔を見れど、威あつて猛からざる武士の、未だ年若き君なりけり。此方はハッと平伏なし。妾ことは池旭といふ旅畫師で御座ります、御慈悲に何うぞ御寛大の御沙汰をお願ひまをしますると。双の手を地につけて、時宜する態の艶なる雨中の花はこれなるべし。

大將俄に威儀を繕ひ。おう〳〵、女子小人は搆ひなしとの掟なれど、此度の合戰にては、事もあるべきに蒲柳婦人の身にて、辱くも天朝に對し奉り、弓矢を引くは何たる不所存ぞ、婦人は淑徳の高きをこそ美しとすれ、槍を揮ひ長刀を提げたりとて、

何程の響となるべき、今や根本の徳川殿には早く既に恭順の意を示し居たまふに、枝葉たる會津藩の、何を當世に恨むる所ありて、斯くまで天下に敵對なすや、其方も今日の所作は、何の爲めに官軍には向ひしぞ、所存あらば聞かむと物和らかに問ひかけたり。

池旭は云ひ解くべき言句も無く、恐れ入りて平伏せしが、大將も左こそと微笑み。只今其方は旅書師と申せしが、確と左樣か、然らば固より會津侯は三代相恩の主君でもあるまじ、何故ありて女隊へは與みせしぞ、たゞしは事を好むの餘、白刄を官軍に向けたるか、片腹痛し、我が薩摩の隼人は、女子童の刄先に斫り捲らるゝ弱虫にあらず、大君の爲め盡し奉る所存には、假令如何なる堅城なりとも、終には拔けざる事のあるべき、會津の城根も陷落ははや旦夕に迫りたり、さるを殊更に陷れざるは數千の生靈を惜みてなり、況してや其方如き女子一人、生したりとて、殺したりとて、何の恐るゝに足るべきや、一命助け遣はすは固よりなれど、其方は書師と名乘るからは、丹青の技に秀でつらむ、折も好し、兵卒等も調練濟みて閑暇と見ゆるぞ、誰かある、墨汁あらば持て來よ、陣中なれど料紙も無いが、時にとつての重寶は、そ

れよ、この幕の白き邊に、得意の花鳥を描ぎ見よと、懸けある幕を外させて、池旭の前にぞ展べたりけり。折りも日は小田山の西に傾きて、野は薄靄に黒み亘り、天野川の流れのみ、遙に白う見ゆけるが、頓てはそれさへ掻き消ゆて、水煙の朧なるあり。時は秋の季とて、陣頭の枯柳に風寒く荒み、並べ置ける劍銃には、早くも霜の降りかくるらむ。營々よ焚く篝火の影も、何と無く哀れに物凄く、旅雁の稀に啼き過ぐるさへ、一入寂寥の氣を添へたり。

かゝる處に絶世の美人來りて、花鳥の圖を描かんとする程に、流石に荒凉を覺えたりし陣中の、俄に春めきて、枯木に百の瓣を着けたる如く、名ある隊長も、兵卒もゝ齊しく傍近く進み寄りて、今や筆を落さんとする池旭を、弓矢の的にも擬へつゝ、吐嗟と瞳子を聚めたり。

池旭は物憂氣に筆執上げて、展べたる布にうち向ひ。御免遊ばしませと一禮して、さらさらと筆を運ばすれば、一枚一葉、翎毛忽ち成りて、早くも一幅の花鳥を描き了りぬ。





並み居る人々手を拍て賞賛し、美事なり、嬋妍なりと宣へバ、池旭はいと面目を施して座を退きたり。

大將は床几に凛と凭りたる儘、悦喜しげに微笑みて、こりや池旭とやら、書は美事に出來たるぞ、殊勝な事ぞや、さりながらその花鳥にて想ひ起せしが、其方は何は越鳥の南枝に巣くふが如く、會津侯に忠義を盡す所存か、決心何うぢやと難ずれど池旭もこゝに度胸を据えて。はい、先刻も申上げたる通り、妾ことは旅畫師で御座りますれど、會津侯を三代相恩の御主君とも思ひませねど、一日なりとも祿を食めど、百世の主君も同じ事と存じ、斯樣に御歴々樣に御敵對いたしました、輕からぬ罪は偏に御免を願ひますと、湧き來る涙を袖に拭ひぬ。

えッ神妙なる心掛けぢや、さりながら大義名分をよつく辨へなど、天朝樣と會津侯と何方が重いと存じ居るか、目前の恩に追はれて、錦旗に手向ひ致さど、冥罰は免れざるぞと、この道理を嚙み分けて、今より善良なる民となり、他日大君の御恩に報ゆる心は無きかと、嚴に說き諭して後。此度は旅畫師たるにめんじて、其罪を許して遣はせバ、何處へ行くとも構ひ無し、はや陣中を立去れよと、云ひ了りて座を

立ち各營をジッと見渡して、味方の軍氣如何ぞと、睨む眼元も凛々しけれ。池旭は事も無く放たれて、陣中を立ち去りけるが、何時の間に日の暮れけむ、空には半輪の月、水のやうに清くして、我が後影の地上に映れる状の醜さ。髮は亂れ、裙ぼろ／＼したるに氣がつき、自と襟を正ふして、月の前に風俗を裝ふも、女子の心の優しき故なり。

花菖蒲

千稻子

其三

嵐よ吹かば吹け、雨も降らば降れ、諸木の梢揉み折りて、千尋の堤押し壞すとも、知章が胸に僅の漣波も躁がず、清潔なる明鏡に、兎の毛の露も留めず、胸を叩いて莞爾笑ひ、愚な奴めと心の底より掴み出した跡は、霽風光月、洒灑として、一輪の梅花香を吹いて匂ふが如し。靜に塵を拂つて枕邊に差寄り、母を慰め菖蒲を勞り、耳端そよ風の拂ひしとも思はず。

眠る草木を撫で丶吹き來る曉の風は、浮き立つ村雲散々に拂へバ、薄紙剝ぐが如く、天地廣濶と明け行き、有明の月は萎れたる柳の葉に隱れて、消え殘りの星影朧ながらに拜れぬ。竹藪には笹の衾離れ兼て寢ながら、雀の二ッ三ッ語り出せバ、曉告ぐる一番の功名に、聲高々と呼廻る早起の烏、露を脊負て飛び行く頃、一鞭二鞭音冴えて、草葉の露に音を研き、野原を花と縱横に彩取る虫の聲々驚かし、跡の音に霧を破つて鬣風に災し、泥土を空に跳ね上げて、驀地に飛び來る武者一騎、此家の門に足搔を留めて、ひらりと飛び下り、轡を片手に大音上げ、「如何に我君、監物太郎御迎に參り候ぞ、いざ歸らせ給へや」、知章は眉を顰めて立上り、「なに監物太郎とな、許す此方へ廻れ」、太郎は馬を門に繋ぎ留め、千草蹈み開きて庭に廻れむ、蟋蟀二ッ三ッ飛び跳たる、目先の木の根に蹲踞りたる怪しの曲者、尻目に睨むで、兩手を土に恭しく額づけむ、知章は躙出で、太郎、我を迎ひとは改りて氣遣し、若しも事の起りはせざるか、」太郎は首を擡げて兩手膝に組み、「其事に就き父君の仰を蒙りして、彼は何者に候ぞ」「汝は彼を見覺えあらん、捻て見よ」、「ハッ」太郎は起つて、づか〳〵と歩み寄り、髻握むで其顏仰向に上より見下して、つく〴〵眺め、「思ひ出したり此奴」、

思はず拳固めて腦天ばかりと一打、「我君、彼こそ青山が家の子に候へ、何か粗忽致候てか」、知章はさてこそと頷きて、莞爾笑ひ、「さもあらん、許せ〳〵構はぬ許せ、コリャ太郎、益なき事に日間費すより、軍の評議に耳を掘れと主人に申聞けと傳へよ」、繩打切りて太腹蹴返せば、倒れては起き、起ては倒れ、盜食した棄猫の、拾ひ兼た命拾つた如く、痛さは物かはこれさへ有らばと、頭を抱へて胡鼠々々と逃げ行けり。太郎は膝進ましして知章の顏つく〳〵と見詰め、「聞き給へ我君、死損ひの賴朝め、又も旗を擧げて關東を大方平げ、早や足柄山を越しとか」、「何、賴朝が旗擧せしとか……」、膝頭握むで椽に打附け、諸齒ギリッと鳴し、「ナエヽ無念……」、太郎は、倘二膝計り刻み出で、「然のみならず信濃の山猿、木曾の小冠者軍起せしとか」、「ム、……東と北に敵を受け都には何と思してか……」、見る〳〵顏に朱は走つて、兩眼に血汐は狂ひ、鬢の毛震ふと共に散り來るは、然も紅混せたる露か涙か、怒りに炎ゆる胸押へて、枕邊に進み寄り、「母人、かゝる譯に候へば、是より都へ歸り候はん、御体大切に思召されよ、一日も早く癒え給はん事、知章蔭ながら祈りまつる、近き内必ず參上るべけれど、我事は御氣遣遊ばさるゝな、菖蒲殿さらぞ、心を附け

給へ」、立上らんとするを、母は頭擡げて暫と押止め、「申すも益なき事なれど、事に臨みて未練なる振舞し給ふな、娘も武士の娘、必ず必らず愚な振舞させぬ程に、されど大切の御身、呉々も血氣の勇に逸り給ふなよ」溢るゝ程の慈愛の露、ひやりと骨に浸み渡りて、身も震ふ計り、怪しや何時になく胸は湊え返りて、瞼に溜るは何の雫か、アゝ心弱し、此樣にて何とて敵中に跳り入らるべき、思ひ切つて立んとすれバ、母は尙乘り出して、「アゝコレ暫し……………、信の祝言を濟した後ならで、母も心を安めんに…………」、思はぬ事に菖蒲は堪らず、顔に潮差す韓紅、朝日眩き紅葉一面に散つて、「母樣そんな事を……」、袖押し當て俯向くもいぢらし。

折角張詰た心、全く壞されて立直した膝、他愛なく疊に落ち、霜に揉まるゝ渚の葦の葉、萎れ返りてつくづく思へど、今日に限りてかゝる事、細々と宣ふも訝しきに、心丈夫の母上は、いつに無く涙差し汲み給ひ、其上我身の胸は裂るが如く、此處一寸も離れ難きは、若しや逢へざる兆にてか、エゝいつそ今日一日留まらん、否、否、未練、未練と宣ひしも此事、菖蒲の前も耻しゝ、さてはどうしてもか、されど此儘玆を、まゝよ耻を忍びて、今暫し、然し母上は許し給ふまじ、いざさらで、返すに

難き千引きの巌、思ひ切てエーヤと跳ね除けつッと立ち起り、「さらば御身大切に」、運ぶ一足後より戻さるゝ如く、脊を纏れて引るゝ如く、進へ切れずにつと見返れは、母の御顔は涙に濡れて、菖蒲までも同じ樣に啜泣、エゝ何の爲ぞ、又も縮まんとする五体、漸と伸び返して出でんとするを、菖蒲は走り寄りて袖を扣へ、顔しげ〳〵と見護りて、「我君……………跡は得云はで涙はら〳〵と濺せむ、云ふに餘る心の中、涙に知れとは身を刺す針よりも辛く、「御身迄が今日の樣一々心得がたし、永き別れといふにも非ず、近き内に必ず來可き我なるに、心痛めず母上の御看病し給へ、いざ」此袖振り拂ふは千卷の太繩、ブッツリと中斷よりも難く、うたてやじりじりと弱り行く心根、これてはと太刀の靶握くる計りに握詰め、片手に険を拂ふと共に、「さらば、心を鬼に袖打ち拂ひ、庭に飛び下りて、馬にひらりと乘り移り、一鞭高く「太郎續けッ」雲か霞か影は遙に消え行きて、蹄の音のみぞ風に送られて聞ゆなる、菖蒲は門に走り出で、倒れんとする體立木に支へて伸び上り、見送る其身に何として人心地あるべき、魂魄は抜けて何處迄もと、其跡追うても行くなる。

今日一日は母上も、心細しと思してか、兎角物も宣はずに、引被ぎてのみ臥し給ハ

た、御體に障りはせぬかと、心は痛めど何に附けても力抜けた如く、勿體なや慰め奉るも物憂くて我身ながら怪しまるゝ計り、只よく／＼と思ひ暮して、早や日輪も隱れ給はん頃、「アヽ愚にも物を思へバ果も無きに、母樣の御氣を引き立てんともせず、此有樣はどうした事ぞ、オヽそれ／＼」、漸くに立上りて燈火附んとすれど、昨日の夜の心强かりし事、又浮び來て胸何となく苦しく、柵伏せたる萩の花、妻呼ぶ鹿の鳴く音悲しく、ちらつく燈火見詰たまゝ、忙然として動きもせず、やがて思返してか、母の枕邊に差寄り、「母樣、母樣、如何で御座ります」、疲れ給ひてかすや／＼と休み給へり。見れバ又悲の種は湧出でぬ。兩手を膝に置いた儘、露重げなる女郎花、細き溜息はつと吹りて、「アヽ此身は何としよう」。

二日三日と暮し、五日六日は忽ち過ぎて、今日は空に一掬の浮雲立ず、少し粘色見せた庭の木枝に、飛び交ふ鳥の羽風可笑しく、折々芭蕉鳴す秋風も餘り淋しとも身に染まねど、いつになく母上の御顏の色も能く自も心持能しと宣へど、菖蒲は嬉しく、雲霧晴れ目見えて胸の痞少し下つた如く、浮ぬ心も稍慰められて、夜に入れど、枕邊に、語りては笑ひ笑いては語り、御心引き立てんと慰め奉る言の端に、何思ひ

けん母は繁々と菖蒲の顔見詰めて、枕紙に涙ぼろ／＼と落し、「菖蒲や、堪忍して呉や、アヽ思へば其方程世に不幸の者はあるまじ、十七年の間少しの樂しみと云ふ事は無く、何に附けても不足の事計り、其上此頃は此身の病に朝夕の看病、其を辛しと思はずに、勞り呉るゝ忝けなさ。コレ母は拜むで居るぞや、アヽさぞ此身を母甲斐なしと思ふ事もあらんが、宥して御呉や。コレ菖蒲、」菖蒲は涙汲むで思はず差し俯きしが、何氣なく粧ひて無理に笑を造り、「母樣、左樣な事御考へ遊ばさば御身の毒、親と子の間何で辛いと思ひましよう、若し妾が病むだ時は勿躰なけれど、御看病願はねばならず、云はゞ御互と申すやうな事、ホヽヽ」、漸く母は涙拂つて、「アヽ最思ふまい……………だが菖蒲、若し父上の存へ給ふならば、こんなにもあるまいに、昔しを思へば是も涙の種、アノ父上はの、それは／＼堅固い御氣質、恐けれど或時院の御所にて、平家の方々を滅ぼし給ふ御謀ある由聞き給ひて、今は、御爲に惡しからんと痛く諫め奉りしも、御聞入れなきに依り、仕を致してかゝる身と爲果しが、彼の知盛樣は此事を聞き給ひて、彼此れと訪ひ慰め給ひ、其上男子あるを幸に、其方と末は妹脊にせんと仰せありしが、父上は訪るゝさへ心憂しと思しゝに、個樣な

事は尚更聞き給はざりしを、強てとの事に已む無く諾ひ遊ばし、後程なく隠れ給ひし故、知盛様も度々訪ひ給はり、屋鋪へ移れと仰せらるゝも、これが結句心安しと足らぬながら暮し行くを、知章様は我身を母と思ひて、さま〴〵の御心附、のう菖蒲、今年の冬には信眞の祝を濟す筈、アヽ早くそうなれかし、此母も安心しように、嵐に惱む姥櫻、散り行く我身は厭はざれど、若木の莟に心引れて、哀れや先つ詑たるゝ不幸、思へは覺束なき行末ぞかし。菖蒲は顏外向けて、袂口に啣へ、「母様、又そんな事宣ひて、此身を困らせんと思召してか、夜も大分更けたやうなれど、サア御寢み遊ばせ、」衾聢と打被せて、風入らぬやう兩端を押し、其上より靜に撫で摩りながら、何としてか片手は兩の瞼を抑えぬ。

文林

梅　　近衞　忠熈

梅の花ときもおそきもさきにけり

岡梅　　徳大寺實則

さくら咲までちらであらなん

春かすみにほふゆふ日の岡のへに
うすくれなゐの梅さきにけり

梅花先春　東久世通禧

春またで梅のはつ花さきにけり
めぐみの露やまづかゝるらん

曉梅　長岡護美

さゝれこす波と見る迄うめのはな
ちりてぞうかべ谷かはの瀬に

落梅浮水　前田利嗣

有明の月のひかりと見るまでに
まくらの山にうめさきにけり

梅遠薫　黒田清綱

遠つまの軒のうめか香うれしくも
我ゆくみちにかをり來にけり

名所梅　高崎正風

梅の花さくはるごとにおもふかな
むかしあそびし月か瀬のさと

暗夜梅　前田利鬯

さらにまた月にきて見んくらふ山
暗はあやなきうめのさかりを

[illegible]　諏訪忠元

うちよする浪に聲をやあはすらん
和歌の浦邊をたつなきわたる

垣梅　植松有經

梅の花かきねのうちに咲きながら
匂はよそのものにぞありける

里梅　谷勤

小山田の里のかきねのうめのはな

つくらぬ枝のおもしろきかな

川にをし鳥の浮べるかた　　松浦辰男

川水のさそふこゝろよさそはれぬ
をしの契のふかくもあるかな

社頭祈世　　師岡正胤

廣御前なほやすかれといのるかな
荒ぶるものはなき世なれども

雅似花　　片岡正占

白妙にこずゑをうめのはなゝりと
おもへど雪のつもるなりけり

霞　　西川須賀雄

有明のつきはしらみてほの〴〵と
朝のはらなりうちかすみぬる

雨小梅　　藤井行麿

降るとしも見えぬ小雨のしめやかに
かすみをくみて梅を見るかな

千倉百首の中に　　森馬太

安房の海さくしら波のはなゝらで
都のひとにをりてやらましを

夏ならでくみても見まし口ひげの
ちりさへうつる山の井のみづ

大姫　　佐々豊水

姫小松みどりのいろはかまくらの
山のはたかくあらはれにけり

中野竹子

嗜みしまてとてこゝろはわかまつの
城の上に高くあらはれにける

紅梅　　内山直枝

白雪のいろにはあらてくれなひの
夕日にまがふうめさきにけり

初春鶴　千日　亮

のどかにも鶴が音すなり津の國の
難波わたりにはるやたつらん

窓前梅　前田　朗子

あさなさなまどにきて鳴く鶯の
木づたふうめは今さかりなり

川邊梅　鶴　久子

隅田川つゝみのはなはまだはやし
此うめそのに明日もあそばん

春雪　諏訪　晴子

乙女子が若菜つまんとゆく野邊の
袖にかゝれるはるのあわゆき

梅間鶯　尾崎すう子

木すゑよりこぼるゝ計り咲うめの
花さへあるをうぐひすのなく

贈梅　安東　菊子

梅の花手折りておくるひとえだに
そへまほしきはうぐひすの聲

師岡須賀子

うぐひすはよし恨むとも君かため
手折れる梅はをしからなくに

梅花先春　片岡　光子

としのうちに二度にほひ咲く梅の
春のとなりのちかさをぞしる

新年雪　河原崎楳野

新玉のとしのはじめにふるゆきは

初はなよりもめづらしきかな

我か宿の梅　　鮫島　元子

春ふかく匂ひこめてそのとかにも
咲き初にけりわがやどのうめ

梅をよめる歌幷短歌　　海上壽子

いきのをに我か待戀し　わしかきの雛のうめは
日影さすみなみの枝ゆ　咲いてゝ匂ひそめぬれ
六の花のめでの餘りに　折取てかざしにもせん
床のへの瓶にもさゝむ　斯計りあくこも知らに
高麗劍われはおもへと　兼てしもぬぐら占たる
鶯のなげきやすらん　振はへて花ゑみ見にと
來む人の佗もやすらん　ろこもへは瓶にも挿す
こゝもへは翳しもせずて　かけたかき梢なからに
愛はやさまし

黄鳥のこづたふ見れはうめのはな
我そのながらをられざりけり

學園

十六夜日記講義（四）

月池閑人

（六）めかれ、せざりつるほどだに、あれまさりつる庭も、まがきも、ましてと見まはされて、したはしげなる人々の袖のしづくも、なぐさめかねたる中にも、侍従、大夫などの、あながちに、打くつしたるさま、いとこゝろぐるしければ、さま〴〵いひこしらへ、ねやのうちをみれば、むかしの枕さへ、さながらかはらぬをみるも、いまさらかなしくて、かたはらにかきつく

とゞめおくふるき枕のちりをだに我たちさらば誰かはらはん」。

前章には出立の事まで云ひたれど、此章以下には更に別れのさまをいへり。●めかれ。めは耳目のめ、かれははなるゝことにて、即、見ぬことなり。●だに。軽るきことをいひて、其他の重きことを詞の外に知らするとき用ゐるてにをは。○まして

どての下、どの上に詞をはぶけり。我(阿佛尼)が居らぬときは一しは荒れゆくべしといふ意の詞あるべきなり。凡どのてにをはにてうけたるところには詞をはぶくこと常に多し。文章のみならず常の話にもあることなり。注意すべし。◎袖のしづく　別れをかなしみて、涙をおとし、其涙にて袖がぬれ、そでより水のしたゝるを袖のしづくといひしなり。こゝにては只泣くことゝみてよし。侍従は爲相卿なり。此時侍従の官に任ぜられてありし故なり。年は十五なり。大夫は爲守卿。此時年十三なり。正五位下の位にてありし故、大夫といへるなり。我國の五位は支那の唐の代の位と較ぶれば、大夫といふに相當す。故に五位のことを昔普通に大夫といへり。無官の大夫敦盛などの大夫も五位のことなり。敦盛は位に叙せられたるのみにて、未だ官に付かざりし故、無官の大夫とよびしなり。因よいふ。凡、大夫の字を書きたるなれど、位にいへるときはタイウとよむべし。又大膳大夫などの如く官名にいふはダイブと濁りてよむを故實とす。◎あながちに。甚しく、◎うちくつし。くつは屈の字の音、くつしは困りたるなり。◎いひこしらへ。なぐさめて。◎さへ。あるうへになほ物ことのかさなるが如きこときにいふてにをは。だにと、さへと、す

らと、三つは、意味まちがひやすし、注意すべし。◉むかしの枕。爲家卿、未だ世にありしときをさしてむかしといひしなり。

大意。常に見ぬことは無かりしときにても、庭も籬も、手入れがとゞかずして、年々益々荒れたるに、なほ此上、我旅に行きて居らぬ後よは、いよ〳〵ます〳〵荒れ果つるなるべし。庭や籬のみならず。此家の事も如何なり行くかと、深く案じこれて、此方彼方をおもはず見まはす。

又別れををしみて、なつかしさうに來て居る人達の泣くのを、慰さむることが出來ぬ。其人達の中にても、まだ十五や十三の子供の侍從や大夫などか、深く心配をして、困りたる樣子を見れば、甚氣づかはしく案せらるゝ故、いろ〳〵云ひ聞せて慰さめたり。

又部屋の中を見れば、なくなりし夫爲家の枕までが、其まゝあるのを見るに付きても、またあらためてなげかはし。それに付きて思ふことを枕のある側に書き付く、其歌の意は、旅に立ちたる跡に殘して置く古き枕のほこりにても我(阿佛尼)立ち去りて居らねば、誰が拂ひ拾てゝ淸くせんか、する人はなかるべし。

（七）よゝに書おかれけるうたのさうしどものおくがきして、あたならぬかぎりを、ゑりしたゝめて、じゞゆうのかたへおくるとて、書そへたるうた、

和歌の浦ゝかきとゞめたる藻鹽草これを昔のかたみともみよ。

あなかしこよこなみかくなはま千鳥ひとかたならぬ跡をおもはゞ。

これをみて侍従のかへりごと、いとゝくあり。

つひによもあたにはならじ藻鹽草かたみをみよのあとにのこせば。

まよはましをしへざりせばはま千鳥一方ならぬ跡をそれども、

このかへりごと、いとおとなしければ、心やすく、あはれなるにも、むかしの人まきかせたてまつりたくて、またうちしほれぬ」。

◉よゝ。俊成、定家、爲家等をいふ。◉さうし。古の書物は卷物にて冊子といふ。

其後今の如きとぢ本は始れり。卷子に對してとぢ本の事を冊子といふ。サツシの音、轉じてサウシとよべり。よりて草子、草紙等の字をあて用ゐることになれり。草の字に意味あるにあらざるなり。此所は、たゞ歌の本といふことなり。◎おくがき。書物の終の所の傳へ來りし故由、又贈り遣ることなどを書きつくることなり。◎藻鹽草。海中に生ひたる草の鹽のしみたるに、猶うしほをくみかけくみかけして、それを燒きて、鹽をとりしものなりとぞ。又物をかくことにもいへり。藻鹽草を掻き集むるの掻きに、文字を書くといふ書きを寄せていへるなり。◎かたみ。死したる人、又は遠く別れし人の形として見るもの、◎あな、かしこ。あなはなけきのことば。かしこは勿體なき、恐れ多きなどの意。◎おとなし。大人らしい。爲相は漸く十五歳なれバかくいへり。◎しほたれぬ。しほたるは泣くこと。前章は、阿佛尼が家をいでたち又人々に別るゝかなしみをのべ、この章には、家をつぎたる爲相卿にわかるゝことをのべたり。なほ次々に爲守、慶融、源承、紀内侍にわかるゝ事をいへり。

大意。俊成卿已來代々の御方の書寫されたる歌の本に奥書をして、其中の要用なる

ものをと、のへて、侍従爲相の方へ遣すとて、書きそへたる歌。

和歌の浦に云云。紀伊の國の和歌浦にて、鹽を燒く爲に、藻鹽草を搔きあつむるといふが如く、代々の人が書き殘されたる歌の本を今與ふる故、之を昔の人、即、爲家卿の紀念を思へ、

あなかしこ云云。我冷泉家、即、俊成より爲相まで受け傳へたる家柄は、一通りのものにあらず、その貴き家柄なることを思ふならば、邪なることをせずして、よく家名をおとさぬやうにせよ。あゝ、かくいふも誠に、おそれ多きことにてあり。此歌、家督のことをおとといふに付きて、其緣語にははまちどり、よこなみなどいへるなり。

かく、書きて遣したる歌を爲相が見て、直に返歌を致せり。其歌は

つひによも云々。和歌の書物を形見として三代の跡をつぎたる自分爲相に賜はりしこと事故、それをむだには致すまじ。今は年も幼けれども末遂には、其書物を用に立て、家の名をあぐべし。

まよ日まし云々。かく書物を殘して教へおかれざるならば、一通りならぬ大切な

る家にてありながら、左樣なることにも知らずに、定め迷ふことなるべし。かく敎へられし上は迷ふことなし。

この爲相の返歌は、誠に大人の歌の如くなれど家の業をつぐことが出來ると思はれて、少しも心配がなし。それにつきても、無くなりし夫に、此事を聞かせて上げたく思ふ。かやうに思ふに付きても、やはり悲しくなりて、泣かるゝとなり。」

學園は、家政の次、漫錄の前に入るべきを、この度限り、編輯の都合により、こゝに置くことゝなせり。

雜報

●華族女學校の幼稚園　このたび、華族女學校内に、幼稚園を設け、專、華族の子女にして、三年以上、六年以下の幼兒を保育することゝせられたり。但し士族平民の幼兒も、入園を許さるゝこととなるべしとぞ。抑、普通敎育を盛にせんには、小學敎育を全からしむるに如くはなく、小學敎育を全からしめんには、また、それより下級に於いて、之が素を養ひおくに、如くはなし。これ、世人の、幼稚園を設くる所以なるべし。從來、我が國上流社會の女子にて、小學敎育を受くるもの、多くは、

其の課程を卒ふるに至らず、中途、退學して、婚嫁するは、偏に、就學期の後るゝ爲なり。されど、右等子女に對しては、學齡に達すると同時に、嚴に、就學を督促するは固よりなれども、又、一方に、就學の便法を與ふるは、最必要なることなりとて、このたび、華族女學校内に、幼稚園を設け、本校に在學するものゝ幼妹等をして、其の姉等と、手を携くて、朝夕登園せしめ、而して、學齡に達するや、直に、本校に就學する便法を與へたるものなりといふ。

●孝婦　播磨國石原村の村上とめといへるは、生れつき、誠に、温順にして、多年舅姑に事へて、孝養怠りなく、且、夫某の病中は、日夜、看護に、力を竭くしたるを以て、このたび、兵庫縣知事より、賞金を受けたりとぞ。とめは、又、能く、家事を整理し、殊に、其の子金作を撫育して、能く、其の行を愼しましめしといふ。

●惜しき少女　兵庫縣城崎郡豐岡町の京口町松岡源十郎の女いしは、一昨年迄、同郡豐岡高等小學校に就學し、第三年にて、家事の都合により、退學したりしが、昨年六月初旬より病に罹り、種々、手を盡くして、療養せしも、其の効なく、本年一月十六日、遂に、歸へらぬ客となりぬ。然るに、同人の病中には、始終、學校の事を語りて、感謝の情を述べ、殊に、死前、凡、二十日計に、平素、餘暇に、他人の裁縫を爲して、蓄へ置ける金一圓を、學校に寄付せんことを遺言し、且、兩親に先つ不孝を謝し、其の在學中の教師、幷に、

生徒などに、永訣の意を致せるなど、家内の人々、涙に咽びたりとぞ。其の父源十郎は、其の遺言のまに、金一圓に、一通の願書を添へ、此の程、同校に差出だせりとぞ。聞くもの、誰か、之を愛しみ哀れまざらん。あはれ、この小女にして、無事に、生長したらんには、必、貞正の婦人とならましものを、いともおしきことになん。

●女子工藝奬勵會　こは、小野信夫ぬしたちが、我が國女子の工藝を奬勵振作せんために、起こされしものなり。吾人は、この會の、彌榮えにさかえて、その目的を達し　我が國女子の工藝をして、大に面目を改むるに至らしめられんことを、一向に祈るになん。また、左に掲ぐるはその趣意書なり。

趣意書

女子に工藝を授けて各自の家計を助け又その獨立を保ち延て國家に益するの急務たる復た余輩の言を俟たす、世間亦夙に意を致す者なきに非すと雖とも其の效蹟の見るに足るものなきは有志の共に憾する所なり、蓋し其の教育上流に偏して下流に及はさるが爲めのみ・夫れ女子工藝の奬勵の最も必要なるは實に一般多數の女子にあり、然るを今日之れを修むる者多くは翠紅綺閣の貴女等か唯消暇の娯樂として習ふに過きざる如し本來の目的を距ること遠矣・

余輩夙に之れを憂ふ、今や幸にして工藝を修むる一般女子の爲めに大に便益を與ふへき其方法を講じ、茲に斯會か創立せり、四方同感の君子願冀はくは此の舉を賛成し加盟補翼の榮を給はんことを・

●家政の栞　この書は、女子高等師範學校助教諭寒澤振作氏のものせられたるにて、その家政のことをしるされたる、誠に注意周到にして、婦人の、一讀すべき價値は、慥に認めらる。發行所は、博文舘なり。

教の庭

二月廿日兼題　水邊鶴

天　　府下芝區三田四國町　師岡千代子

浪たゝぬ御代のすがたの池みづに
　なれたるつるの聲ののどけさ

地　　愛知縣新居郡玉津村　内藤清子

三島江のいり江に汐やみち來らし
　あされる田鶴の聲さはぐなり

人　　肥后國菊池郡隈府町　千々波橘子

住の江のきしうつ波にあらそひて
　いよ〳〵しろし鶴の毛ごろも

今朝よりは春や立つらん芦たつの
　みぎはによむふ聲ののどけさ　　神田春子

（天地人のほかは原稿到着順なり）

見渡せはのどかに霞むわかの浦に
　そこともわかず鶴がねぞする　　滞口秀子

千代よむふ聲すみの江の芦田鶴は
　しはひの潟にあそぶなりけり　　石井億子

たつかねは水かみ遠くきこゆなり
　音なしがはにたつなみもなく　　羽田三緒子

千年へん己かすかたをうつしつゝ
　かゝみか池にたづぞなくなる　　羽田高子

芦たづのむれ居て遊ぶさわみづの
　そこには千世の影も見ゆらん　　土生清子

風たえし和歌の浦曲にすむたつは
　おとなき波とまかひぬるかな　　上野兼子

長閑なる池のみきはにうちむれて
　つはさゆたかに遊ぶつるかな　　高井米子

うすらひもわとなくとけて深根芹　河野　文子
生ふる澤邊に田鶴あさるなり

毛衣をかさねきたれどかはかせは　江馬　信子
なほさむからし鶴のなくなる

吹風によせくるなみとながめしは　片岡　光子
みぎはばなれぬ鶴の毛ごろも

大空をすみかとなしてまふつるは　留守　巨様
わかの浦わをたびぢとやせる

松か枝にすむひな鶴の千代〳〵と　遠藤　鹿子
わかの浦山にいまぞなくなる

難波江のみぎはに遊ぶあし田づの　永野　むら子
こゑも長閑けき御代ぞ嬉しき

ゆたかなる君が御代とや祝ふらん　花山　やすね
芦邊にたちて田鶴ぞなくなる

吹く風によせてかへらぬ白なみと　花山　みさを
見ぞまがひぬる田鶴の一むれ

夜の鶴あし邊にたちてよもすから　花山　きのと
なくや我子をこふるなるらん

明日は來てつまむと思ふ芹がはに　村田　きよ子
あされるたづの聲ものどけし

千代をへしみぎはの松の友づるは　鈴木　てつ子
いつのむかしや巣立しにけむ

難波津のあしまに汐やみちぬらん　志賀　操
こゑものどかに田鶴鳴わたる

きのふけふ芦べに遊ぶあしたづの　高野　運
聲はくも井にきこえぬるかな

打よするなみもしつけき千とせ川　諏訪　晴子
むれゐるたづの聲ゆたかなり

和歌の浦のみぎはに近く住む鶴は　平野　君子
きみが御代をば祝ふなるらん

葦鶴のあそぶさわべのみづきよみ　伊達富貴子
おのか影をやともとまがはん

和歌の浦に千代よびかはす友鶴の　水谷　清子
こゑものどけき君か御代かな

廣澤のいけのみぎはによおり立ちて　佐々有鄰子
こゝろのどけくあさる鶴むら

うちよする波も一つに毛ごろもを　小橋　幸子
朝日にさらす千代のともづる

難波潟日かげのどかにあしたづの　澤田　春子
やちよをよぶ聲ぞゆたけき

さは水におり立つ鶴のすがたこそ　新沼すみ子
千年をいはふしるしなるらめ

水の邊におりゐる鶴のかげみれバ　新沼すゑ子
よはひものぶる心ちこそすれ

白波のよするかすみがうらかぜに　渡邊　旻子
きそひてうたふ千代の友づる

五十鈴川みぎはに遊ぶあしたづは　松田　靜枝
神代ながらのよはひをやへし

呼びかはすとものよはひも千年川　松田　孝子
あしべつたひに鶴ぞあされる

阿蘇沼の水田あさりてむらつるの　宮川きよ子
ともよびかはす聲あはれなり

にごりなき君がみ池にすむつるの　渡邊　益子
千年をよぶこゑぞのどけき

千代千代と來鳴く瀉洲の友づるは　井上　安子
つきせぬ御世を歌ふなるらん

千代ふれどわかの浦わになき渡る　加藤きみ子
たづのよはひや老せざるらん

いく千代を和歌の浦わに渡るらん　中川ゑん子
田鶴のよはひの限りなければ

住よしの松を千とせのともとして　横山きみ子
みまへの濱にあさるむらつる

高砂のうらふくかぜもさよふけて　野尻　鶴子
かたむく月にたづぞなくなる

我かやどの池のみぎはになく鶴は　碓井のぶ子
わがおほきみの千代祝ふらし

和歌の浦に打むれゐつゝなく鶴は　碓井たけ子
みよを八千代と呼かはすらん

にごりなき池のみぎはに大きみの　青木　春子
御代ゆたけしとあそぶ鶴かな

己がへん千年のかげをうつしつゝ　藥師寺芳子
きよき川邊にあそぶあしたづ

住の江のあし邊つたひに鳴く鶴の　櫻田登代子
こゑのどかなる春のそらかな

あしたづの影をうつせる川みづは　小野　秋子
千年のよとむかゝみなりけり

風わたるさほの川なみたちかへり　永井きわ子
またもきこゆるはしたづの聲

消えのこる雪かとむかり若葉つむ　續木香芽子
さはべに見ゆる鶴のひとむら

すこもりし松をはなれて影きよき　横山須賀子
淺さはみづにあそぶともづる

わかの浦にたつしら浪と思ひしは　横山　柳子
千とせをふべき鶴の毛ごろも

白波のこゆると見へてみぎはなる　植木　鋼子
あしまかくれにたづ遊ぶなり

いく世へんかぎりしられし水清き　永井さい子
池のみきはにあそぶともづる

なにはがた浦ふく風にきこゆなり　古田　兼子
千とせを祝ふつるのこゑ〳〵

水かゞみうつろふ影のしらなみは　青木まさ子
ちよをことぶくつるの一むれ

雪かともよそに見えしは淺さわの　佐野よし子
みぎはにあそぶつるの一むら

和歌の浦しほ干にあさる蘆たつは　稻田　兼子

み代を八千代とよひ交すらん

朝日さす入江のみづにかげとめて　秋　のぶ子
こゝろのどかに鶴ぞあされる

千年ふるみどりの松のかげみゆる　初田みち子
のざはの水にあそぶたづむら

波のよるみぎはにあさるおや鶴の　澤田せい子
あとにはたてる雛もありけり

白波のよするなぎさにおりたちて　青柳　茂子
ちとせとちぎるめをのひな鶴

しづかなる池のみぎはにすむ鶴は　堀内やす子
心のまゝに千代やふるらん

住の江によりくる波の羽ごろもを　岡　さは子
をりかさねても遊ぶひなづる

住の江のきしへにすめる眞名鶴は　土屋てい子
水かゞみにや千代を見るらん

なくこゑものどけかりけり千歳川　綿田　穀子
友よびかはすつるのひとむら

うちよする波の色よもまがふかな　國富　直子
水際にあさるあまのたづむら

難波江の蘆間かくれにかけ見えて　堤　かね子
ち代よぶたづの聲のさやけさ

大君の御代なが丶れと千とせがは　辻　やす子
みなかみとほく鶴ぞなくなる

行く水に影をうつして鳴くたづは　松浦さだ子
すがたも聲もすみわたりけり

難波江の水際にむれてなくたづは　猪原すみ子
のどけき春やはきかはすらし

さ丶なみもた丶ぬ澤邊に蘆田鶴の　廣田とめ子
千代よふ聲は去つけかりけり

むら鶴はあさりしぬらし水の面に　大谷　友子
已が千とせのかげうつしつ丶

已が世のよはひをうつす千とせ川　宇野さく子
むれゐる田づの聲の長閑けさ

なにはがた蘆間にあさるむら鶴の　横敷たか子
聲や千とせの去るしなるらむ

住よしの岸にむれゐてきみが代の　吉田　芳子
ちとせを祝ふつるのもろこゑ

千歳川にともよひかはす蘆たつの　山河　俊子
こゑさやかにも聞えけるかな

のどかなる春の野さはにとも鶴の　永易たきの
遊ぶも御代のめぐみなりけり

君が世は久しかるらしこ丶の江の　永易　幾野
み池のおもにたづあそぶ見ゆ

ときはなる松かげうつる池の邊に　黒澤まつゑ
千代をかたらふ友づるのこゑ

二月廿日兼題　勸學の文

天　愛知縣東加茂郡阿摺村小町區　横山きみ子

世に貴き事ども多かめれど學びの道計りいとも貴くいみじきわざはあらずかし千早ふる神のふましし道吳竹のよ丶のひじりのふみのあとふみわけならひて身にも行ひ事にもほどこしさては千里隔てし異國のふり萬代すぎしいにしへのさま久方のあまつみそらの事どもよりあらかねの地のめぐりのことはりまでつむらにあきらめ得らる丶ハ學びの道をおきて外にやはある君に忠に親に孝なる道妹

背のなからひはらからのついでともどちのまじらひも學びの道を逆りてこそくはしくわきまへ心得てふみもまよはざるべけれされバ何人も學びの道にいそしみなバざらん高く品まさりて萬にいみじかりなんかし古へ印刷の術未だ開けず學校の設け未だあらざりし時にて志厚きものはあるは手づからうつしもて學びあるは千里の遠きをものとせずして師を求め貧しき中にも螢をあつめ雪をつみ暇なき中にもねるひま休らふひまをもて學びたるいみじき例も多かるぞかしさるを今の世の求むるふみの得難きはなく通ふ學びやのそなはらぬはなきひじりの御代に生れあひはごくみあつき家にそだちながら學バんともせずあだに月日を送らんはこれぞ古人のいひけん自暴自棄にしていともはいなきわざになんいで今の世の人たらんもの心の駒にむちうちて學びの道にすゝまずてやはあるべき

地　熊本縣阿蘇郡黒川村大字役犬原　宮川きよ子

人として學ばざらんには徒に四肢五官をそなへて人とに生れいでたるのみにてとりけものと異なるところ更になしといはんもたがへる言にはあらじかしことさら／＼からの聖人が「學バざれバくらし」とも又「夜もすがらねもやらでおもへども益なし學ぶにしかず」ともいはれたるわけにこそわりにこそあはれ全き人の形をそなへながら禽獸とひとしきなど言ひはやさるゝはさても口惜しくかなしきことゝならずや　されバ人たるものは學バずてかなはぬことは暗き室の内にともしびかゝげたらむごとくにていと明らかなることとなりかしさて其を學バんには方向を誤らざらん心懸こそ肝要なれ　およそ女子のさがとして少しく文字をよみかきする程になれバ　ひとり物識り顔して人をさげすみ　おのれを高ぶるなど常のくせなれどよくよく心すべきことにてかゝる學問ならんにはかへりてなさゞらんにしかじ學問の要とする所は人倫五常の教を守り人の人たる道を知りかたはら日用の事に不自由なき爲めのみにこそさるを世の人折角學問にうち立ちながらおのれは愚鈍なる生れつきなれど逆も物の用にたつ程にはなりがたからん

などいひていまだ半途にも達せざるうちに止むるものまゝありこれらは思はざるの甚しきものにて精神一到何の事か就らざらんとの金言の如くまゝ心をこめてなさんには何事か成らざることのあるべき

ある夫人の歌に

まなふへし山猿すらもをしふれは
立ち舞ふわざはなすなるものを

此の歌の意をよく〳〵味ひたらんには思ひ半ばにすぎなんかし

廣島縣廣島市字新川場町　人　岡　さは子

人は生れながらにして物の理をわきまふるものならねど必しも成長に從ひ學の道にたどりいるべきなりさるを世の中に女子には學問は不用なり學ばずともありぬべしなどいふものありとかや是は大いなるひが事にこそ元より男子は外に出でゝ事を成し女子は内に居て家政を司り夫の氣を助け子女を養育してまめ〳〵しく務むることこそ一は御邦の爲め一は家の爲めに盡すべき大いなるつとめにはありけれ學びの道によく通じ物の道理をよく辨へ居らずば其大いなる責をおふ事かなはずされば女子たりとも學ばでやはあるべきまして敷島の道は我邦のうるはしきすがたにして天地をも動かし鬼神をも泣かしむとかや女子たるものは必しも心得居らざるべからざる道になん今は文明の御代となりて都も鄙もおしなべて誠に完全なる學の制を立てられぬれば男女共に心のまゝに學ぶるゝのみならず過にし二十年あまり三年てふ年の十月には敎育の勅語を下し給ひてその方針をさへ示させ給ひければ敎育の道はいよ〳〵開けに開けて日々に盛になりゆくころ實に難有き御事にはありけれされば心のかぎり學びはげみて千々の一つも高き御恩に報い奉らでやはあるべきことと思ふになん

佐々有鄰子

朝には鷄よりはやく起出で夕には牛よりおそくかへり來て雪に螢にいそしみはげみ心の柱ふとくたくましくつきたつるぞ人の子の掟にはありける是をまもるにあるは石を枕としあるはふともゝに

雖さして物學びせし唐人のむかしをゆめわするゝことなく何わざにまれおのれよしとおもへる事をひたすらにつとめはげみなばつひには高き位の山にもよぢのぼりぬべく深き學の海をもやすくわたりつべし世のかたくな女と身をはふらさずつとめたまへ姫たち學びませ孃たち

松田　靜枝

夏は螢を燈とし冬は雪を明りとしあるは繩を梁にかけさては錐を股にさしゝは昔の人の上にのみ見るべきかはさるを今の世の人春は花にうかれ秋は月に遊びて文机の塵に埋るゝをも知らで徒に年をおくることの多きよ螢を文よむ友とせずしてたゞ嚢中に玩び雪の窓には只吟賞の聲を洩らすのみならんにはあはれはる〴〵と學びの旅路に草鞋つけそめしかひあらんや學びの道に志し給ひし君たちよ再び來らざる齡年をいかにして送り給ふぞその花の如き紅顏の痩せ衰へて頭に雪の白髮の戴くも黃粱一炊のひまとは思ひ給はずや生涯の春時たる少年の時に學ばずして遊び暮しなどあはれ霞につつまれて朧なる春の月の如く世に清々しき光をも放たでやがて雲がくるべき時の來ぬらむかし百川東していつれの時か又西に歸るべきあゝこれを思ひてつかのまもたゆまで文の林に心の駒をすゝめ給へや

碓井のぶ子

今日ありとも明日ありといふ事なかれと古人は言ひけんはいかにたふとからずや今年今月今日今時また二度めぐり來ずされど柳の糸のながき日とて野べにのみあくがれず管の根のいと長き夜とて物語にのみ燈に費さずよく古人の言を守りしあだにすぐさずいたづらにくらさずよくつとめよくまなびて彼の歐州婦人にもおとらずあはれ總には文明の賢母良妻とあふがれ給へとていさゝか拙き筆をはしらせまゐらするになむ

碓井たけ子

精神一到何事不成といふことあれば難き事とて厭はずつとめなど學びの海はいかに廣くとも學びの道はいかに遠くともつひにはその果てを極めぬ事

やはあるさりながら病には勝たれぬものなれどつゝつりおはさんにはよく身を養ひ給へ又さはり無からんにはしばしも怠りたまはず螢や雪を積み重ね唐人たちにおとらぬやうつとめたまはんことのみねがはしうてなむ

碓井わか子

玉もみかゝずバ光なからん人もたゆまず屈せず學業をつとめはげみて後にこそ香しき名はあらはるれはしたなき虫すら各々能ありて人と生れて虫におとらんやはされど山のはじめは一塊の土にして海のはじめは一滴の雫と聞きつれどみたりに急ぐともかひなからんたゞ怠らずたゆまず學ひの道をたどりて敎への庭に進みいたり給はん事をねかふになむ

織木香芽子

賤か織りけんあら布もうますたゆまず清水もて打さらしなバ妙に白き布ともなるものぞとは母か常々のいましめなりされバおろかなる妾がせつなる志をあらはし人々の笑はん事をもたへしのびて世に打さらしなむ此道にいたり深き大人達の御情もて正しきに導かせ給ふ事もやとかくはしるしつゝあはれ姫たちもわらはも同じ志にものし給へや

佐野よし子

いにしへより學もんといふこと盛に行はれつれど中古にいたり世の中みだれいくさのみつゞきたる時は世のさわがしきにつれて人の心もしづまず文よむひまもあらねバ日〳〵すたれたれどそが中にもこがくれてかいま見たる人もありとか世のしづまりてよりはいよ〳〵ひらけて今の世にかくれてはやさるるまでにいたりしこそ尊けれいよ此世にきこえたる貴き學者めでたき人も少からねどこれらはいづれも幼きほどより學びつとめたるしるしのあらはれたるなりされバ生れながらの才ありとも其の學びといふことなき時はまことの賢者とはいふべからず玉も磨かざれど光りなしといへる古人のいともうべなるかな

初田みち子

開けゆく世の學の業をとゞむる關はあらざれど春

の花夏の螢秋の月冬の雪と難波入江のむらあしの一夜の如き月日を[illegible]に思ひてたゆまず折れず心の駒にむちうちてはげむべきなりかゝれどたとひ學の道は遠くともつひにはいかでいたりつかざらむ昔の學問はたゞひとすぢにて今より見れどいと易き樣なれどもなほ賢人はなげき給へりさるを今日の事しげき學の業はいかでたゞびとのなしうべきされど今は昔と異なりて學の海にわたるべき舟あり教の山にはたどるべき梁ありて道しるべすれば何かはためらふ事あるべき心をこめて勉めはげまんにゑかし軒端に巣をあむくもだに藝ありて勉むなり花に遊べる蜂にも能ありてひねもす蜜を作れりされど人とある者はかゝる虫にしかで有るべきかは

怠らずまなひてだにも及むぬを學ばでゐなばいかかあるべき

土屋てい子

古語に業廣惟勤といひ玉磨かざれば器をなさずとこれ深く心をつくべきなりまた「いたづらにけふも夕べのむらがらすねぐらにかへる聲聞ゆなり」とはある人の詠みたまへる歌なり妾此歌をめでゝいたづらに日をおくるを心のいましめとするはかかる聖の御代に生れあひて學びの道をおこたりつとめずてたゞいたづらに日をつひやすのみあるはいとあたらしき事にあらずや明けぬれば暮る物とは知りながら窓の雪は目をよろこばすためにつもり門の螢は暗きをてらしてすゞしくとぶとのみ過しては無下に口惜しましてや老ひの後はいかにくゆるともかひなかるべしされば世の若人たちよかの司馬温公が圓木の枕歐陽公が蚊帳の燈火の烟に煤けしを常に忘れたまふなといさゝかおもひしよしを記し侍るなはいたづらに夕べのからすの聲をなも聞過して日を數へ夜を重ぬるのみは御代の御民にはあらざるべしゆめおこたりそ眞白玉淸きがうへに磨きあげていそしみたまひねかし

廣田とめ子

今の世の人身の裝ひなどにいとも心のくだかれて何事につきても開化などとはいふめれどそはいか

なることにや誠の開化とは心の光をころいふならめ心の光を出さんとならバ學の道より外はあらじこゝをもて人は幼より雪に螢に怠りなく心の玉をみがきてあでやかなる光を出さんころ姿形よりはひときはまさりてめでたく思はゆれ特に女子は夫をたすけ家を治め子を敎え育つるはどいとも重き役目を負ねるものにてよそにそつきてはいよ〳〵其かたきを覺ね悔べき事の多かるべきものなれぞそこもとにも世の中のあだし心にうつり行かで常々文よむすべに怠らず心の光をみかき出されん事を幾重にもねがひはべりぬかくまうすはまことにをこがましき事なれど古の文にも死喪の威れ兄弟孔懷ふと見ゑし如く姉の心として思ふことの切なるまゝ一筆まうしつかはしぬ

二月五日兼題　紀元節

碓井のぶ子

常盤なすよろづ世までも變りなき我大御代のめぐみの露にうるほひて民草日に增し生ひまさりなびき從ふはまたく大君の稜威によりてなり此の如き天津日嗣の正しきは我國ならでいづくにやはあるべきされバ祝日ごとに立るしの國旗をかゝぐるはたゞ祝のこゝろのみならず我國民の赤心を万の國人に輝さん爲めなりあゝこの祝節こそいとも〳〵樂けれなほ大君の御代のいやかぎりなくさかえまさんことをねがふになん

三月兼題

五日
- 歌……………雛遊
- 文……………紀行

廿日
- 歌……………海上雲
- 文……………春の野に遊ぶ

正誤

前號漫錄中太宰純の俗樂論のはしがきに「その著駿臺雜話」とあるは「その著獨語」の誤。

餘芳

みちのつと（つゞき）　小池道子

橋は、いたく、ふるびたるが、中々になつかし。むかひの家ゐ、わざとならず、心安げなり。うちのさむぶねなど、かねて、きゝけるが、けふは、ひとつだになくてさう〴〵しきこゝちす。

みくるまのかよふみちにといでぬらんさす人もなしうぢの河舟。このわたりより、茶園多し。田はたのけしきは、かはることなし。

行さきのかはるたびぢにかはらぬは麥とすゝなのはたけなりけり。村山とも多かれど、馬車なれば、名も聞かず。夜、いたう、ふかしけるに、けさも、曉ふかく、おき出でたれど、をり〳〵、ねぶけさしぬ。長池につかせたまへり。かの、ゐねぶりしつることなどいへば、宮の大夫、耳とくきゝつけたまひて、いぎたなかりつる君かなど、わらひたまふ。げに、いかに、みぐるしかりけん。こゝをいでゝ、ほどなく、井手の玉川と、あらたにたてたるふだあり、山ぶき、いさゝかさけり。木津川

の堤にかゝる。堤のまたを行くほど、まことにあつし。木津川の橋、馬車にて、わたらせたまはんは、心もとなしとて、まづ、御車をわたす。かはのこなたに、みちたる人、數しらず。何ごとをかいふらん、どよみあへり。御野立にて、しばし、やすらはせたまへり。こゝぞ、いづみかはなりける。左の方に、おもしろき山のみゆるが、かせ山にて、みかの原は、ふもとの方をいふなりと、人のかたる。都いでゝけふみかの原と、よみけんころのたびぢは、いかなりけん。今は、ならにも、時のまに、いたりつきぬべし。川はゞひろくして、清き流に、しばし、せうねうせまほしきこゝちす。むかひにも、人多くして、かはらにかあらん、舟にかあらん、水みえぬまで、立ちならびたり。有りがたき行啓、拜まんとて、遠くよりも、出でたる成るべし。木津宿にて、やすらはせたまへり。大夫、また、ねぶりたりやといふに、いかで、さは、ねぶり侍らん。井手の玉川は、みずやといふに、しらずとこたふ。さては、君こそ、ねぶりたまひけめ、山吹も、さきてありしを、といひてわらふ。

ねぶしともいはぬいろなる山ぶきをゆめのこてふはしらですぎけん」。とおもへど、口さかなしなど、いひはやしたまはんも、口をしければ、いはでやみぬ。奈良

縣になりぬ。家のつくりさま、人のけはひなど、西京にことならず。般若寺を過ぐれば、さはがはなり。長からぬ橋をわたるほどにて、よくもみず。光明皇后の御浴室も、かたばかり、のこれり。すこし行きて、雲井坂としるしてあれど、さしも高からず。みかさ山、たかうそびえて、かう〴〵しく見ゆ。春日野、飛火野、雪消澤など、芝生、清らに生ひしげりて、千とせへにけん、松の村立、おもしろし。倶樂部につかせたまへり。あたらしう、たてたる家にて、おましは、いふもさらなり、すべて、ひろう、清らかなるに、若くさ山、ちかうみえて、芝生、みどりに、うすく霞みたるけしき、ゑもいはず、をかし。繪にうつしてだに、もてかへらまほしうおぼゆ。圓照寺の宮、法華寺の尼君など、まゐりたまへり。くれぬれば、所の人々より、琴ひかせ、御覽せさせんとて、みやびて、そうぞきたるをとめども、あまたまゐる。親ども、いかに、心をつくして、つくろひたてけむ。ことはてぬれど、產物ども御覽ず。東宮の、鹿の角もてかへらせたまひてよと、のたまひしを、出ださせたまひ、こよなう、めづらしきを、もとめさせたまふ。今夜は、人々も、つかれたるべしと、仰せられて、とく、大とのごもれり。

女鑑第五十六號目次

（明治二十四年八月八日内務省許可）
（明治廿五年三月十二日遞信省認可）

社告

〇代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送之事〇郵便爲替は東京銀座郵便取扱所へ御振込可被下事〇郵券を以て代金に換用せらるゝ時は一割增の事〇別に領收書差出さず金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若強ひて領取證を要せらるゝ方は別に證書郵送料御送附の事〇未納稅の來書は一切受取不申候事

女鑑
每月貳回五日廿日發行

定價壹冊金十錢
三ヶ月前金五十五錢
半ヶ年前金壹圓
但全國無遞送料
廣告料五號字廿三字詰一行金二十錢

明治廿七年二月十九日印刷
同　年同月二十日發行

東京京橋區築地二丁目二十一番地
發行兼印刷人　川崎直衛
同
編輯人　山根勇藏
同
發行所　國光社

（印刷所　東京國光社印[illegible]）